

花葉

2009
No.28



花葉会 発行

www.tokitaseed.co.jp

TOKITA

シャングリラ・ ブルーアンドパープルマジック



シャングリラの横張り性、寒咲き性に加え、
下の花弁が白から青に変化し、上の花弁が青から青紫に
うつろう今までに無い花色の変化が特長。
All America Selections2009入賞品種!

ひろがるビョウ
シャングリラ
Shangrila

1株直径 35cm
シリーズ11色!
新色2010年発表予定!



1株植えても、直径45cmの鉢から溢れんばかりの大株に!

トキタ種苗株式会社

本 埼玉県さいたま市見沼区中川1069
社 048-683-3434(代) FAX048-684-5042

イワタニ農業資材&省力機器



カナダ産ビートモス
(ヨーロッパ産ビートモスもあり)



ミキサーと小型ポッティングの組み合わせ

播種用土

- ・MIXビート、BM-2
- ・システムソイル

エクセルソイル



■発売元

イワタニアグリグリーン(株)

本社 〒111-0051 東京都台東区蔵前3-12-8

TEL:03-5687-0751 FAX:03-3862-5147

大阪支店・福岡営業所

■製造元

京和グリーン(株)

〒640-8391 和歌山県和歌山市加納277-4

TEL:073-474-5117 FAX:073-472-8526

松島工場・平尾工場

家庭園芸の変遷と問題点

望 田 明 利



この原稿を書いているのは数日前に39年と半年勤めた会社を退社したばかり、まだ辞めたという実感が無い状態です。約40年間消費園芸資材(薬品・肥料)会社に勤務して感じた実感をつれづれなるままに記してみました。

家庭園芸の普及はNHKテレビにおける園芸番組の放映(1960年、当初は「季節のしおり」)が、一部の趣味園芸愛好家の園芸から誰しもが手軽に楽しめる園芸への脱皮の始まりであった。全国ネットで放映時間が日曜日の朝食時間帯のため視聴者も多く、「婦人百科」の中に記載されていた園芸記事が、「趣味の園芸」(1973年創刊)として独立して発刊され、一時は夢の100万冊に迫る勢いがあった。テレビ番組のテキストという性質にあったにせよ、毎月多くの人々が購入、驚異的なことであった。

1990年に大阪市の鶴見緑地公園で開催された「国際花と緑の博覧会(花博)」は家庭園芸業界にとっては明治維新に匹敵する変革であった。広大な面積が花で埋め尽くされたのに感動した人は多く、植物の種類や品種(花色)の多さには驚かされたものである。更に、従来の平面的な花壇からハンギングなどで立体的に飾る方法や寄せ植えなどが認知された。

この花博を境にして、家庭園芸の質が変わったように思う。これまでの男性中心の園芸から女性中心の園芸へ、植物で

はサツキ、盆栽、古典植物などから洋ラン、鉢花、草花へ、庭中心の園芸から室内、ベランダ、玄関先など園芸を楽しむ場所が拡大してきた。現在誰しもが何の違和感もなく使用している「ガーデニング」、この言葉は12年前の1997年の新語・流行語のトップテンに選ばれており、変革後の家庭園芸の歴史は新しいものである。

歴史が浅いだけに、様々な問題点も出てきている。取り上げれば多数あるが、販売サイドの問題と指導者の問題だけ取り上げてみる。現在、植物や園芸資材類の販売はホームセンターなど量販店が大きなウエートを占めている。例外的な店もあるが販売員の園芸知識の欠如である。お客様が勝手に選んで購入するという考えかも知れないが、質問されたときに的確な返事ができない現状である。後者は自称「園芸研究者」「グリーンコーディネーター」と称する人の質の低下である。寄せ植えなどでは色彩的な感覚も大切であるが、基本は植物の栽培である。苗を購入して育てる時代のため、種子から育ててとは言わないが、栽培経験に疑問符がつく人もいる。

今後は、今までお世話になった園芸業界の発展のため、これら問題点の解決のために微力ながら努力していきたいと思っている次第です。

花 葉

2009
NO.28

目 次

私の提案 家庭園芸の変遷と問題点	望田 明利 (1)
第5回国際パラシンポジウム、岐阜で開催	上田 善弘 (2)
水草の世界にどっぷりと一進化、そして保全	田中 法生 (6)
富山県中央植物園と中国科学院昆明植物研究所との交流	神戸 敏成 (10)
植物と過して	石川 祐聖 (14)
JFTDから消費者への情報発信の場「フラワー・ドリーム2009 in Tokyo」	石川 君子 (17)
丸の内仲通りのハンギングバスケット装飾への道のり	武内嘉一郎 (20)
私の生まれた頃の東京郊外の風景に読む日本の花産業史	田中 桃三 (25)
自叙伝抜粋 私が見てきた千葉県の花き生産と普及事業について	小泉 力 (28)
表紙解説 キョウチクトウ	上田 善弘 (32)
花の芸術家たち①	安藤 敏夫 (33)
祝：園芸学部創立100周年記念事業報告	鈴木 邦彦 (40)
「2009花葉サマーセミナー」報告	久保田芳久 (44)
花卉園芸学研究室レポート 花漬けの日々	小川優理子 (48)
園芸別科花組レポート 園芸学部100年、節目の年に	日野 綾子 (49)
花葉会賞受賞記念講演	今西 弘子 (60)
追悼 故小杉 清先生の思い出 (50) 秋山泰男君を偲んで (51)	
花葉会総会 (52) 花葉会賞受賞者紹介 (56) 花葉会会則・役員名簿 (55)	
会員名簿の追加と訂正 (62)	

禁無断転載

第5回国際バラシンポジウム、岐阜で開催

岐阜県立国際園芸アカデミー

上 田 善 弘

本年(2009年)5月24日から5月28日まで、岐阜県にて「第5回国際バラシンポジウム」が開催された。私はこのシンポジウムのコンビナー(招集者、主催者)として会議を主催したので、その概要について紹介させていただく。

国際バラシンポジウムの開催まで

正式にはこのシンポジウムは「5th International Symposium on Rose Research and Cultivation」という。あえて日本語訳すると、「第5回 バラの研究と栽培に関する国際シンポジウム」ということになる。

本シンポジウムは国際園芸学会(ISHS、International Society for Horticultural Science)の下に開催される専門部会で、バラの場合は4～5年おきに世界各地で開催されてきた。バラの研究に携わっている世界各国の研究者が集い、最新の研究成果を発表、討議し、お互いに情報交換する唯一の国際シンポジウムである。これまでの第1回から第4回までの開催は以下のようにあった。

第1回 イスラエル(1985年)

第2回 フランス・アンティーブ

1995年2月20-24日、発表課題:77課題、

参加者100名(内フランス36名)

第3回 イスラエル・ヘルツリヤ

2000年5月21-26日 発表課題:基調講演1、

一般講演:口頭37、ポスター15、

参加者89名(内イスラエル24名)

第4回 アメリカ・サンタバーバラ

2005年9月18-22日 発表課題:口頭34、

ポスター40、参加者96名(内アメリカ43名、24ヶ国)

第1回が開催地のみになっているのは、最初だけ私が参加していないためである。有名なバラ育種会社、メイアン社のお膝もと、フランスのアンティーブで開催された第2回のシンポジウムに私は初めて参加した。100名ぐらいの

参加者でそれぞれがお互い親しく交流でき、このようなシンポジウムなら毎回参加しようと思ったものである。第1回から第2回までは10年も空いてしまったが、その後は5年おきに開催されてきた。第4回はカリフォルニアのサンタバーバラで開催され、バラの品種改良、苗生産で有名なジャクソン&パーキンスの苗の生産圃場を視察した。とてつもなく広大な生産圃場にどの参加者も唖然としたものである。

さて、この第4回アメリカ大会の際に次回の開催を日本の岐阜で開催したいという意思表示を私の方からさせていただいた。通常、会期中にこのシンポジウムの中心となる方々が集い、次回の開催地について審議される。私の意思表示を受け、日本も開催候補地の一つとされた。本来、開催は5年後であるが、2010年には親学会である国際園芸学会の開催年であるため、重ならないようにと2009年に開催することが決まった。

このバラシンポジウムは国際園芸学会の傘下にあるため、あくまで主催者は国際園芸学会で、シンポジウムの開催は学会本部の決まり事にしばれることになる。まず、国際園芸学会から提案書の提出依頼があり、岐阜で開催することの意義、内容等を盛り込んだものを観賞植物部会長に提出し、審議され、国際園芸学会理事会で承認されるという運びになる。今回はもう一つの開催候補地、ドイツが開催を辞退したため、自動的に岐阜で開催されることが決定した。それを受け、国際園芸学会会長と私が所属する岐阜県立国際園芸アカデミー学長が契約書を交わし、実際の業務がスタートすることになった(2007年8月31日に契約)。専門委員会(海外のバラ研究者を含む)と開催地の組織委員会を立ち上げ、開催にむけての準備、具体的な開催計画の審議を進めていった。組織委員会は当アカデミーの教員3名(私を含む)、岐阜大学の教員2名、岐阜県農業技術センターの研究員2名で構成した。会期は当地、岐阜が誇る「花フェスタ記念公園」のバラの最盛期を見ていただくことを前提に5月の最終週とした。一年半前にシンポジウムを公開し、参加登録の



長良川国際会議場にて集合写真

できるホームページを立ち上げた。

シンポジウムを開催し、参加者を歓待するにはそれなりの資金が必要となる。そのため、各種の国際会議開催への助成金に申請、さらには民間企業への協賛を依頼した。ところが、昨年秋以来のリーマンショックによる世界的な経済不況により資金集めが困難となり、参加者数も減少し(円高等による海外からの参加者への負担増)、窮地に追い込まれることになってしまった。当初は、出来る限り潤沢な資金を集め、多勢の方に参加いただき、大いに盛り上げようと計画していたのであるが、大幅に計画を縮小せざるを得なくなってしまった。さらには今年になってから、新型インフルエンザが発生、流行し始め、本当に開催できるのか、直前まで分からない状況であった。

研究発表

直前までやきもきしたものの、何とか開催することができ、海外から11ヶ国38名、日本からは学生も含めると71名の参加者があり、シンポジウムとしての体裁は整った。

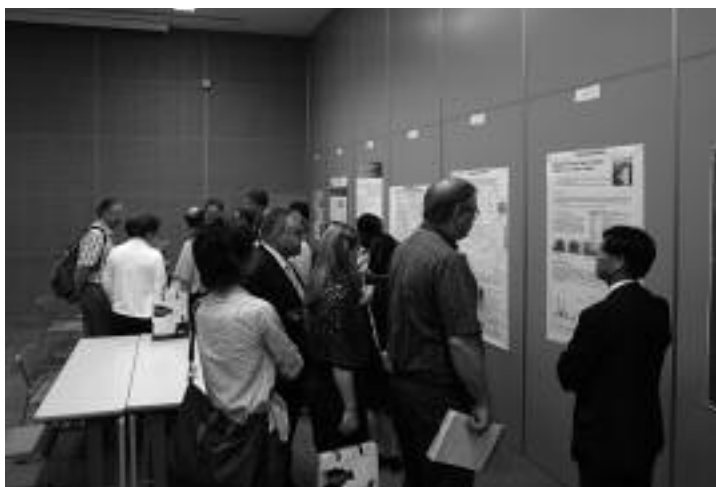
会場は、岐阜市の長良川国際会議場と可児市の花フェスタ記念公園花のミュージアムとした。長良川国際会議場では5月24日夕方から歓迎会、25、26日に研究発表を、花フェスタ記念公園では5月28日に研究発表とバラ園視察、フェアウェルパーティを開催した。長良川国際会議場

は岐阜市内、駅から北に車で15分ほど、長良川沿いにあり、有名な建築家安藤忠雄氏の設計である。国際会議室は最上階5階にあり、卵形をしている。演台側(スクリーン側)が長良川に面し、扉を開けると正面に金華山と岐阜城、眼下には長良川の清流と鶴飼い船の発着場、絶景な眺めである。どこにもないすばらしい会議場で、歓迎会もこの会議場で開催し、参加者には夜遅くまで歓談、堪能していただいた。

さて、研究発表であるが、今回は口頭発表31課題とポスター発表28課題の発表があった。これらの研究発表以外に、静岡大学名誉教授の大川清先生に基調講演をお願いした。演題は「日本の切花バラ産業の過去および将



長良川国際会議場での歓迎会 長良川を見ながら交流を深める



ポスター発表会場

来」で、バラの研究者として長く関わって来られた視点から、日本の切花バラ産業がどのような変遷を経てきたか、アーチング栽培法のような新しい技術開発、近年の輸入バラ攻勢、燃料高騰にどのように立ち向かえばいいのかの提言までをご講演いただいた。大川先生はこの国際バラシンポジウムの立ち上げにも関わっておられ、第1回のイラエルでのシンポジウムの参加者でもある。この立ち上げに関わったメンバーをその当時、ローズマフィアと呼んでいたこともご紹介いただいた。今回の参加者のなかには先生の古くからの研究仲間もおられ、旧交を温めておられた。

口頭発表31課題の内訳は、植物生理2課題、繁殖4課題、遺伝資源2課題、花の香り1課題、育種6課題、遺伝7課題、病害虫4課題、栽培3課題、ポストハーベスト2課題と幅広い発表内容であった。ポスター発表は国際会議室とは別の会議室で、各発表者が研究成果をポスターとして掲示し、参加者とポスターの前で研究内容について議論するものである。



花フェスタ記念公園ミュージアムホールにて研究発表

また、第4回のアメ리카大会では、サントリーの田中良和氏が遺伝子組み換えによる青いバラの研究発表をされていたことから、今回のシンポジウムでは、ポストツアーでサントリーの山崎の研究所を視察する予定であった。ところが、新型インフルエンザの流行により、サントリー側で感染国からの視察者を受け入れないという連絡が入り、視察できなくなってしまった。そのため、シンポジウムの会場に遺伝子組み換えにより育成された実際の青いバラを田中氏が持参され、展示、説明いただいた。海外からの参加者にとっては初めてのことであり、好評を博した。

大会4日目には研究発表会場を花フェスタ記念公園に移した。この会場では、日本のバラ生産者にも公開とし、そのために同時通訳も準備した。課題についても、生産者にも有用な情報源として、病害虫、生産、ポストハーベストに関するものを集め、発表していただいた。研究発表を午前中とし、午後からは最盛期を迎えた花フェスタ記念公園のバラを見ていただいた。

夕方からはミュージアムホール内のレストランにてフェアウェルパーティを開催した。パーティでは、岐阜県内の切花バラ生産者、市橋滋利氏(千葉大園芸学部卒、花業会会員)の奥様 市橋若菜さんによるオンドマルトノ(フランスの古い電子楽器)の演奏をお願いし、会を大いに盛り上げていただいた。

産地視察

このシンポジウムの大きな特色として、名称のなかに「栽培」と入っているように、現地視察が組み込まれていることが挙げられる。今回も中日、3日目に一日、バラの生産現場の視察を行った。

まず、愛知県西尾市にある農事組合法人レインボーを訪問した。この法人では大規模な連棟温室で切花バラが生産されており、ヒートポンプ、除湿機等が入れられ施設内環境が自動制御されている。また、作業は主にフィリピンからの研修生により行われている。

その後、地元岐阜県に戻り、神戸町の全天候型バラ観賞温室内で昼食をとり、周辺のバラ生産組合の切花バラ生産を視察した。続いて大野町のバラ苗生産者、河本バラ園を視察した。岐阜県のバラ苗生産は全国一であり、



花フェスタ記念公園のバラを視察する参加者

水田を利用した根頭がん腫病等の病害を回避する日本独特の苗生産の様子と河本バラ園での育種の実際について視察した。最初の視察地が遠方でもあり、予定が全体に遅れていたが、最後の視察地、セントラルローズではミニバラの大規模生産の現場を見せていただいた。



産地視察にて 農事組合法人レインボーの切花バラ温室

ポストツアー

上述のように、ポストツアーの目玉であったサントリー研究所の視察がなくなってしまったため、ツアーの参加者が減ってしまった。そのことによる参加費の値上がりにより、

最終的には参加者は5名になってしまったが、予定通りツアーを行った。ポストツアーは当初から関西方面で計画しており、サントリー研究所の代わりに滋賀県守山市の国枝バラ園を視察、その後、京都にて清水寺、金閣寺、大徳寺、平安神宮を1日半かけて視察した。このツアーへの参加者は、オランダ、イタリア、エクアドルの研究者であった。

以上、本シンポジウムは4年前の第4回シンポジウム後に構想し、準備期間に2年を要した。資金的なことや今回の新型インフルエンザにより直前まで開催が危ぶまれたが、何とか無事開催することができた。この国際シンポジウムは千葉大から岐阜に異動した際に、いつか岐阜へ誘致したいと常日頃思っていたものである。開催期間中、また開催後も参加者からすばらしいシンポジウムであったとお褒めと感謝の言葉をいただき、その達成感と充実感に長期戦の疲れも吹き飛ぶ思いであった。同時にこのシンポジウムの開催にご理解をいただき、多大なご支援を頂戴した団体、民間企業、さらにはシンポジウムの運営を支えていただいた岐阜大、名古屋大のスタッフ、学生の皆様に感謝する次第である。

水草の世界にどっぷりと—進化、そして保全

国立科学博物館筑波実験植物園

田 中 法 生

私は千葉大学を卒業後、東京都立大学の大学院、そして国立科学博物館筑波実験植物園に赴任してからもずっと水草の研究を行ってきました。花卉園芸学研究室で野生植物の多様性に感化され、軽い趣味で栽培していた水草も研究対象として面白そうだと気づき、博士論文のテーマにトチカガミ科を選びました。それ以来、水草の世界にどっぷりと浸かってしまったというわけです。

水草の定義はとても曖昧です。Cook (1974) は、「栄養器官が常にまたは年数ヶ月以上水中または水面にあるシダ植物および種子植物」としていますが、コンセンサスの得られた明確な定義はありませんし、いろいろなグループからの寄せ集めです。しかし、水草が陸生植物から水環境によく適応進化した植物群であることは確かで、その平行進化した寄せ集めの植物群が同じような適応を起こしていることが水草の面白さの根源なのです。

園芸とはずいぶん離れてしまいましたが、私がやっていることを中心に興味深い水草の世界を紹介し、現在水草がおかれている状況にも触れたいと思います。

水草の受粉の進化

水草の受粉はどのように行われるかご存知でしょうか？陸上植物の7～8割を占める被子植物が、現在のように多様化し繁栄したのは、送粉機構があらゆる場に適応できた結果と考えられていますが、そのほとんどは風媒(全種子植物の20%)もしくは動物媒(80%)です。実は水草の多くも風媒か動物媒です。しかし一部にはこれを放棄して、水を受粉手段とするように進化した種類が存在します(0.06%) (写真1～3)。このような水媒受粉は11科31属約150種に知られており、ほとんどが単子葉類のオモダカ目ですが、淡水、汽水、海水のいずれの水域にも進出しています。詳しくは述べませんが、その仕組みは実に巧みにできています(遺伝53巻5号(1999)参照)。この水媒受粉が、どのような祖先から、どのような進化の道筋をたどってきたのかということに興味を持ち、トチカガミ科という



写真1 セキショウモ(トチカガミ科)の受粉。雄性花水面媒—水面に浮かんだ1mmほどの雄花(周辺)が雌花(中央)の柱頭に‘漂着’して受粉する。

写真2 クロモ(トチカガミ科)の受粉。花粉水面媒—水面に浮かんだ雄花から花粉がはじけ飛んだ後水面を漂って雌花に受粉する(写真は雄花と飛び散った花粉)。



写真3 ウミヒルモ。水中媒—水中に雄花と雌花が咲き、花粉は水中を漂って受粉する。写真の細長い糸のような部分が柱頭。

グループに着目しました。

DNAと花粉などの形態を詳しく調べた結果、地球上の植物の中でトチカガミ科にだけ見られる花粉水面媒と雄性花水面媒はともに一度きりではなく何度も平行進化していることがわかりました(写真4)。しかも花粉の形は各送粉機構によく相関して進化していたのです。つまり、水面媒・水中媒が水草にとって適応的なしくみであること、一般的には各グループでよく似ている(変わりにくい)とされる花粉の形も、水環境ではダイナミックに変化することが

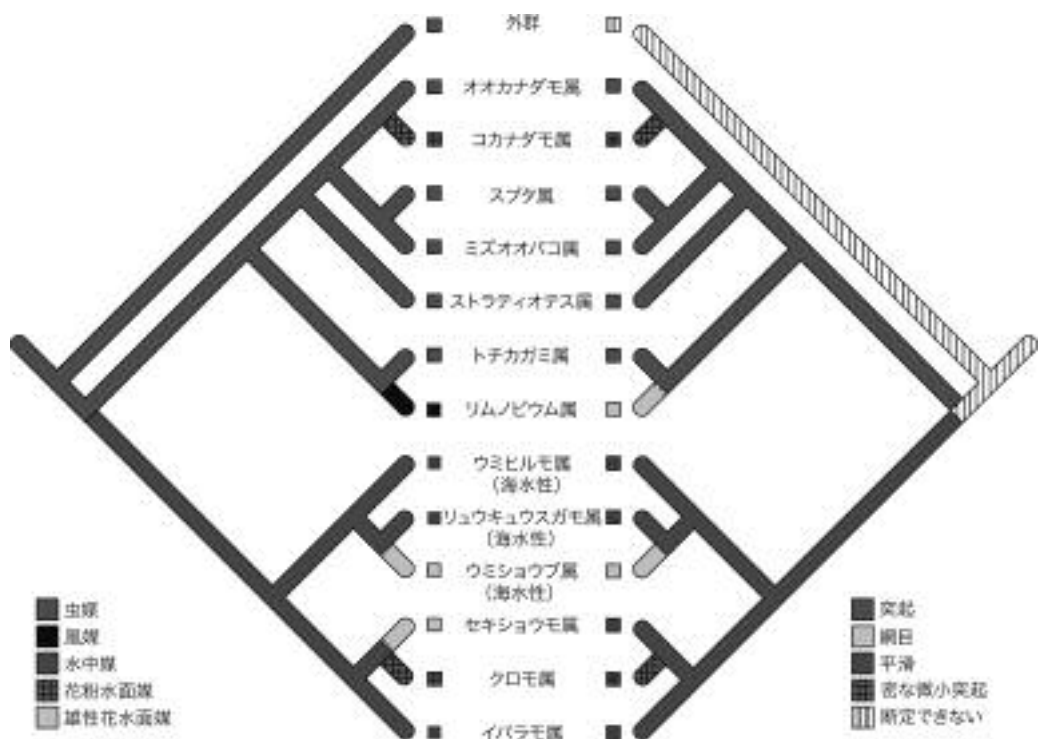


写真4 トチカガミ科の分子系統樹と受粉機構および花粉形態の進化過程

わかったのです。水草が水環境によく適応していることをよく示す例といえるでしょう。

水草の種子はどのように運ばれるのか

自ら動くことの出来ない植物にとって種子をいかに運ぶかは重要な課題です。水草では、一般的な風散布の他に、水流(海流)や鳥による散布が多く見られます。そうした特有の種子散布が、分布や種分化、遺伝的な構造に与える影響について2つの例から紹介します。

北半球温帯の浅い海に生育するアマモ(アマモ科)(写



写真5 アマモ

真5)は、種子が葉の鞘に包まれた状態で海面を移動すると考えられていますが、実際にはよくわかっていませんでした。そこで海流などの海洋環境と種子の移動がどのような関係があるのかを明らかにするために、日本全国のアマモ集団の遺伝的な関係を調べました。その結果、おおよそ地域ごとにまとまる、つまり近くにある集団の間では種子がよく行き来をしているという、至極当たり前の動きが示されました(写真6)。しかし、データをよく見るとい

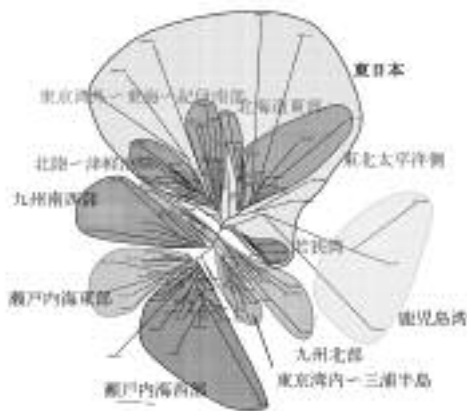


写真6 マイクロサテライトによる遺伝子分化係数に基づくアマモ137集団の系統樹

くつかの面白いこともわかりました。例えば、紀伊半島南部には5つのアマモ集団がありますが、南端にある潮岬の東側の3集団は東北・北海道・北陸と種子の行き来がある一方で、西側の2集団は瀬戸内海や房総とよく交流をしており、東西の集団間では交流が非常に弱いことがわかりました。東西の最も近い集団は10kmくらいしか離れていないにも関わらずなのです。はじめはデータのミスだと思いましたが、この地域の海流を知ると疑問が氷解します。日本列島を北上する黒潮は、九州、四国、紀伊半島まで陸地に近接して進みますが、紀伊半島の潮岬から急激に南下し、その後房総半島周辺へ近づきます。そのため、紀伊半島の西側から東側へは種子が移動せず、むしろ遠くはなれた東京湾へは黒潮に乗って交流が強く見られたのでしょう。紀伊半島の例だけでなく、総じて私が想像していたよりもずっと海流によってアマモの種子が強く影響されていることがわかったのです。

河口などの汽水域に生育する水草は、そこを訪れる渡り性の水鳥によって種子が運ばれると言われてきましたが、渡り鳥はすぐに糞を排泄してしまうともいわれ、実際に遠距離を運ばれるのかどうか疑問視されてきました。そこで、汽水生水草のカワツルモ科(写真7)について世



写真7 カワツルモ

界各地のサンプルを対象にDNA解析などを行いました。その結果、これまでのカワツルモ科の分類は大きく変更する必要があることがわかりましたが、最も興味深い結果は、日本の北部に生育するカワツルモは本州などのものとは別種で、はるか5000km離れたオーストラリアのカワツ

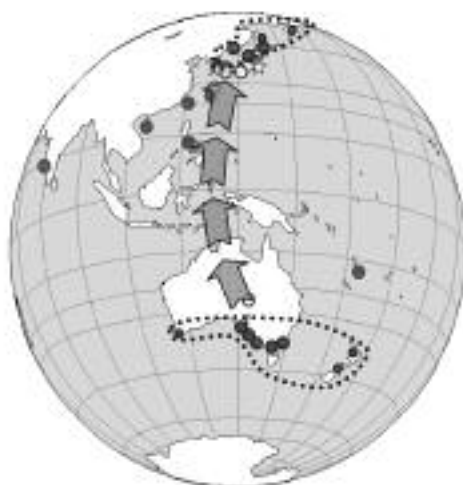


写真8 カワツルモ科の隔離分布の様子。
点線で囲んだものが同種と考えられる。

ルモと同種の可能性が高いということです(写真8)。シベリアからアジア、オセアニアは一つの渡り鳥ルートに含まれること、両地域の遺伝的多様性の状況などから、渡り鳥が日本とオーストラリアの間を種子散布してこの隔離分布が生じたと考えられました。

カワツルモで見つかったこの現象は、種の形成に関わる大スケールの散布でした。他の汽水生水草種についても同様なアプローチをすることで、種分化と渡り鳥との関係がより明確になると考えています。さらにアマモなど海流散布の種類との比較も興味深いところです。

絶滅する水草を救う

ここまで水草に特有な特性を断片的に紹介しましたが、実はこのような特殊な進化を遂げた水草には絶滅の危機に瀕している種類が多いのです。日本には230種類ほどの水草が見られますが、その40%は絶滅危惧種(環境省 2007)となっています。維管束植物全体では絶滅危惧種は24%ですから、水草は特に危機的状況にあることがわかります。

ある植物を保全するには、その分類学的位置づけ、生態、遺伝的構造などを理解する必要があります。私が以前に取り組んだガシャモク(ヒルムシロ科)(写真9)という植物は、日本で1カ所の自生地だけが残る絶滅寸前の水草ですが、過去に自生していた手賀沼周辺の堆積層の種子(埋土種子)から発芽し復活しました。研究を進めた結果、現存する個体群よりも堆積層の種子群の方が遺伝



写真9 ガシャモク

的多様度が高いことが示され、埋土種子の利用が保全の重要な材料となることがわかりました。また、近縁種との間に生じる種間雑種とは見た目だけでは完全には区別がつかないこともわかり、保全活動にはDNA解析を併用して同定する必要性も見いだされました。元々の自生地の環境改善が行われた後には、これらの研究成果を指針にして、植物園で保存している埋土種子由来の個体が再生に役立つと期待しています。

さらに一歩踏み込んだのが、現在取り組んでいるコシ

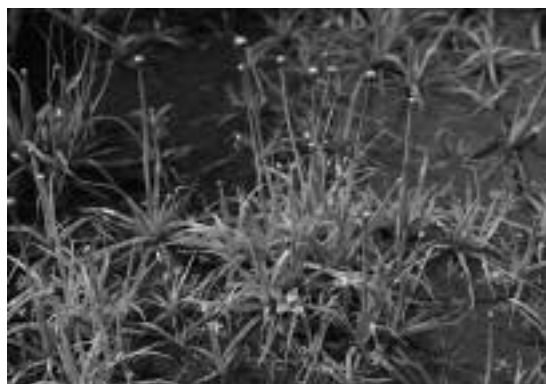


写真10 コシガヤホシクサ

ガヤホシクサ(写真10)です。野生からは絶滅してしまった稀少な水草ですが、最後の自生地への野生復帰を目指して保全研究を行っています。植物園での株と種子の長期的保存実験と並行して、絶滅の原因となった水位の問題を水利関係者と合意形成を行い、絶滅前の状態に戻すことができました。現在(2009年9月)は、現地に播種をして発芽した個体が生存しており、現地で生活史を全う

できる条件を探っているところです。‘植物版トキ’のようなものですが、何とか成功させたいと考えています。

水草を研究し保全する新しい試み

水草に関する断片的な話をしてきましたが、全てに通じて「水草の面白さを追求し、それを保全する」ことが自分のキーワードであり、今後もそれを続けていきたいと考えています。そして、これを欧米の植物園と比肩できるレベルで実現したいと考え、2007年に「水草保全ネットワーク」(<http://www.bgtym.org/aquatic-plant/>)を設立しました。水草の保全や研究を行っている複数の植物園でネットワークをつくり、巨大水草植物園を作ろうという構想です。まだ始まったばかりで、日々の仕事に埋もれがちではありますが、少しずつでも理想の形に近づけるようにしたいと思っています。



写真11 水草保全ネットワーク

富山県中央植物園と 中国科学院昆明植物研究所との交流

富山県中央植物園 神 戸 敏 成

富山県中央植物園

私が富山県中央植物園に着任したのは平成6年9月1日です。当時の富山県中央植物園は屋外展示園のみを部分開園するという未完成の状態で、ようやく展示温室の建設が始まりかけていた頃でした。その後、平成8年4月26日に富山県で開催された全国都市緑化祭に合わせて全面開園し、4つの展示温室（熱帯雨林植物室、ラン温室、熱帯果樹室、高山植物室）も公開されました（写真1、2）。



写真1 上空から見た富山県中央植物園

富山県中央植物園は植物展示のほか、教育・普及、調査・研究を行う日本海側初の総合植物園として整備され、調査・研究に携わるスタッフが10名いる我が国では稀有な存在の植物園としてスタートしました。私は現在企画情報課に属し、イベントや広報、友の会関係の仕事をする傍ら、組織培養の技術を用いた絶滅危惧植物の増殖・保存や育種に関する研究を行っています。

中国雲南省との交流

私にとって幸運であったのは、すでに多数の植物が導入されるなど、富山県中央植物園と中国雲南省との交流が始まっていたことです。この交流には県内の財界人の尽力があったと聞いています。花葉会の方であればご存知の通り、中国雲南省は「野生植物の宝庫」とも称され、植物の研究者にとっては憧れの地であり、もちろん私にとっても一度は行ってみたい場所でした。

この植物導入事業は平成12年まで続き、600種（品種を含む）を超える貴重な植物が富山県中央植物園に導入され、植栽して一般公開すると共に研究材料として活用されています。全面開園直後の平成8年5月には、当植物園と雲南省にある中国科学院昆明植物研究所との間で友好協定が調印され、末永く交流を進めることが確認され、今日に至っています。

屋外展示園の雲南コーナーには雲南省で最も有名な景勝地である「石林」（現在は



写真2 富山県中央植物園の展示温室群

世界遺産)から運んだ石組みも完成し(写真3 P.13)、チヨウキンレンやハンカチノキなどが入園者を楽しませています(写真4)。平成12年2月には雲南省から導入したトウツバキと熱帯植物を展示するための雲南温室が完成しました(写真5)。このように雲南省から導入した植物は富山県中央植物園の目玉になっています。



写真4 チヨウキンレン (地涌金蓮)



写真5 雲南温室で咲くトウツバキ

昆明植物研究所との共同研究

さらに、平成12年10月には雲南省の省都昆明市において、富山県中央植物園と中国科学院昆明植物研究所との間で共同研究に関する合意書が調印され、平成13年から10年間に渡る共同研究を行うことになりました。この時には、私も当時の黒川道園長に同行し、調印式に出席しました(写真6)。当時は今ほどインターネットが発達していなかったので、電話とFAXで日本とやり取りをしながら、二日間かけて合意書の文面を作り上げたことが私の記憶の中に今でも鮮明に残っています。

合意書の内容は「雲南省の貴重植物(特に稀産・絶



写真6 共同研究の調印式

滅危惧植物)について保全生物学的な調査・研究をする」ということで、5期10年の間に、ペゴニア属、マメ科、モクレン科、ツバキ科、サクラソウ科を主に研究をするというものでした。この合意書の内容は後に、基礎研究に加え応用開発研究を行うことも追加され、モクレン科とサクラソウ科が外された代わりにアヤメ属が加えられました。5期9年目を迎えた今年度は、トウツバキを中心にこれまで共同研究を行ってきた植物について調査・研究を継続することになっています。

この共同研究に関する合意をきっかけに両機関はさらに関係を深めることになりました。平成13年度からスタートした共同研究のトップバッターとして私が指名され、ペゴニア属を主たる研究テーマとして雲南省に3ヶ月間滞在することになったのです。私にとって中国を訪れるのは5回目(雲南省は3回目)でしたが、3ヶ月間の長期滞在は初めての経験であり、期待と不安が入り混じっていました。中国語は你好、「謝々」くらいしか喋ることができない私は、初めのうちは文化の違いに戸惑っていたのですが、植物導入時に富山県に滞在し、すでに日本語をマスターしていたたくさんの友人に助けられました。

3ヶ月間の滞在中、私が行なったのは4回の野外調査と組織培養によるペゴニアの増殖方法の確立でした。ペゴニアの調査では熱帯、亜熱帯地域である雲南省の南部から南東部にかけて、西双版納(シーサンパンナ)やベトナム国境の街である河口(ホーコウ)へも行きました。野外調査では毎日新しい植物との出会いがあり、感激でした(写真7、8)。

また、この滞在期間中に、忘れることができない植物



写真7 熱帯植物の特徴のひとつの板根



写真8 ベゴニア自生地を調査する筆者

との出会いがありました。それは、雲南省北西部の高山地域へ調査に出かけたときのことです。雲南省の北西部には以前からどうしても見てみたかった植物が私にはありました。「ヒマラヤの青いケシ」と呼ばれるメコノプシス属の植物です。メコノプシス属の調査が目的ではなかったのですが、もしかしたらという期待が内心ありました。ところが、調査期間中メコノプシス属の植物に出会うことは無く、最終日も夕方になり心残りではありましたが、ホテルへ戻ることになりました。諦めかけていた帰りの車中、ふと見た道路の法面に咲く青い花が私の目に飛び込んできました。まさに青い花のメコノプシス属植物でした。標高3300m、息が切れるのも忘れて法面を駆け上がり撮影をしました(写真9)。その後、雲南省ではほんとうにたくさんの美しい植物や珍しい植物に出会いましたが、このときの感激は今でも忘れることができません。



写真9 青い花が咲くメコノプシス属植物

第二の故郷 雲南

このように富山県中央植物園と中国科学院昆明植物研究所との友好は15年以上の長期にわたり続いています(表1)。県立の植物園が海外の研究機関と行なっている交流としては例が無いのではないかと感じています。このように長い年月をかけて築いてきた信頼関係は今後も長く続いていくと確信しています。

個人的にも雲南省とは深い繋がりができ、雲南省に多くの友人もできました。平成14年以降も毎年1週間程度ですが、私の出身である千葉大学育種学研究室(現植物細胞工学研究室)の三位正洋教授や学生時代の仲間と一緒に雲南省へ植物の調査に出かけています(写真10)。今では中国雲南省は私にとって「第二の故郷」のような存在になっています。これからも地道に交流を続け、日本と中国の友好の一助になればと思っています。



写真10 麗江の玉龍雪山の4680m地点にて

1993	◆「富山県中央植物園が第一次導入計画により雲南の植物(144種類)を移植する件」に関する協力合意 ◆雲南植物の導入開始 ◆昆明植物研究所の職員派遣による交流開始
1994	◆「富山県中央植物園が第二次導入計画により雲南の植物(518種類)を移植する件」に関する協力合意および「富山県中央植物園に石林の石を用いた庭園を建設する件」に関する基本合意
1995	◆石林の石を用いた庭園完成
1996	◆「中国科学院昆明植物研究所との友好協定」に調印
1999	◆友好提携3周年を記念し、中沖県知事(当時)が昆明植物研究所を訪問し、記念植樹を行なった
2000	◆展示雲南温室完成 ◆雲南植物の導入完了
2000	◆中国科学院昆明植物研究所と共同研究に関する合意書に調印
2001	◆中国科学院昆明植物研究所との共同研究開始

表1 富山県中央植物園と中国科学院昆明植物研究所との交流年譜



写真3 雲南コーナーに設置された石林の石

植物と過して

東京大学 大学院農学生命科学研究科 附属緑地植物実験所 技術職員

石 川 祐 聖

私は平成16年に園芸別科花卉専攻を修了して、現在は東京大学の技術職員として緑地植物実験所という施設に勤務しています。

緑地植物実験所は‘大賀蓮’の種子が発掘された事で有名な千葉市の花見川区にあります。多数の花蓮コレクションと椿やツツジ等の樹木が植栽されており、緑地としての機能を持つ施設です。子供の頃から植物に携わる職業に就きたいと考えていたので、現在の職に就けた事は本当に嬉しく感じています。

この度『花葉』への執筆依頼をうけて、お世話になった方々への感謝と共に、現在まで経験した業務と出会った植物について、書きたいと思います。

東沢バラ公園にて

別科を修了して初めての勤務地は、山形県の村山市にある東沢バラ公園でした。4年間という勤務期間でしたが、社会人として一から業務を指導していただき大変お世話になりました。

東沢バラ公園は、その名の通りバラを主体とした緑地公園で、山に囲まれた約7ヘクタールの敷地に750品種、約2万株のバラが植栽されており、オリジナル品種である‘むらやま’など他では見る事の出来ない品種も



東沢バラ公園

あります。春と秋には「バラ祭り」が開催され、時には結婚式の会場にもなる美しい公園です。私が行っていた公園での業務は植栽植物の維持管理が主で、1年を通じたバラの管理は実務ならではの大変さと発見があり、とても勉強になりました。

特に春の剪定と冬の雪囲い作業は、印象に残っています。もちろん咲いた花を見るのは楽しいのですが、剪定も雪囲いもその花を咲かせる上でとても重要な作業です。4月からの勤務でしたので、初めてバラに触れたのも剪定作業でした。2万株のバラを5名ほどの人数で剪定するのですが、冬の積雪が多いため雪解けに時間がかかります。必然的に作業の開始時期も遅くなるのですが、バラが生育を始める前に作業を終える必要があるため、20日ほどで剪定を終わらせなければなりません。それには正確さは勿論のこと、かなりのスピードが要求されます。

バラを育てた事のある方はご存じかと思いますが、剪定にはいくつかポイントがあり、良い外芽を残す事と高さを抑えて揃える事が重要です。この2点をおさえた上で不要な枝を除いていくわけですが、初めの頃は枯れ葉や雪囲いで使用した縄が邪魔して枝がよく見えず、なかなか狙い通りには剪定できませんでした。作業を指導して下さったベテランの職員の方が、雪囲いを解きもせずに剪定をしているのを見た時はとても驚きました。まるで、初めから剪定後の形が分かっているような迷いのない剪定でした。植栽面積が広いので、剪定の後に全体を見渡すと整然とした美しさがありました。それを見ると開花時期を待たなくとも「今年もよく咲くな」と言う事が分かるようで嬉しくなったのを覚えています。

開花期は、たくさんの来園者の方で賑わい、あっという間に過ぎて行きます。そしてバラが休眠期に入る頃から雪囲い作業が始まります。これはバラを寒さから保護すると共に積雪による倒伏や枝折れを防止するための措置ですが、東沢バラ公園の場合は積雪が1m以



オリジナル品種「むらやま」

上あるため、かなりしっかりと固定する必要があります。1株につき3本の竹杭を使って固定していくのですが、2万株あるバラだけで6万本の竹杭を使用することになります。その他にも細木や板、それらを固定する縄の量は「本当に使いきれのか」と思うほど膨大です。作業は10月に開始して雪に追われながら12月半ばまで続きます。バラにとって剪定が始まりの作業だとすれば、雪囲いは1年を締めくくる作業になります。1株ずつ縄で縛っているとその年の生育状況が感じられ、雪囲いの作業が終わりに近づくにつれてその年に行った全ての作業がまとめ上げられていくようでした。

公園の管理業務は、剪定と雪囲い作業の他にも薬剤散布や除草、時にはキャンペーン活動など、多岐にわたります。特に少人数で作業をこなそうとする場合は、全ての作業を年単位で把握する必要があります。また、決められた時期に花を咲かせるには、その年ごとの微妙な気候変化を予測しなければなりません。これは経験の積み重ねと土地の性質とを知って初めて実行可能であり、知識だけでは決して出来る事ではありません。4年間の勤務で全てを習得出来たとは到底思えませんが、当たり前のように花を咲かせる事の難しさ、公園を次の世代へ伝えていく事の大変さを学べた事は、貴重な体験だったと感じています。

緑地植物実験所から

現在の勤務地である緑地植物実験所には、初めにも書いた通り多数の花蓮コレクションがあり、200品種を超えています。「花蓮」とは読んで字の如く花の観賞を目的とするハス品種の事で、私にとっては緑地植物実験

所に勤務して初めて出会う言葉になりました。千葉大学園芸学部のキャンパスにも大きな水鉢にハスの花が咲いていたのを記憶していますが、花としてハスを見る機会は他の園芸植物と比べると少ないのではないのでしょうか。花の咲き揃う7月には町のイベントである「観蓮会」の会場として開放され、早朝から短い時間にもかかわらず数千人の見学の方が訪れます。1ヶ所でこれだけ多くの品種を観察できる場所は国内でも少ないため、写真家の方にも人気の場所になっています。花蓮の知識がほとんど無かった私ですが、今年4月からの勤務で知ることになった新しい世界を紹介したいと思っています。

花蓮の栽培は鉢とコンクリート枠で行っているのですが、種類が多いため圃場には大型の品種から小型の茶碗蓮まで500以上の鉢が並んでいます。大型品種の葉は雨傘のように巨大で、花は30cmほどにもなります。小型品種は10号鉢程度の容器で栽培でき、10cmほどの花が咲きます。花色は紅色・桃色・黄色・白色が基本で、黄色品種との交雑によって黄色みを帯びる品種も作出されています。花弁先端の色が濃い「爪紅」や白地に紅色が入る「斑蓮」など実に多彩な表情があります。一重だけでなく八重品種もあり、雄蕊や花托などが全て花弁化した千弁蓮は花弁数が数千枚にもなります。またメントール系の甘い芳香もあり、広い面積で栽培すると幻想的な雰囲気です。

花蓮の維持管理は、植え替えから始まります。毎年新しい蓮根ができるため鉢栽培の場合は根詰まりを起こしやすく、前年の蓮根と共に腐敗してしまう事があります。そのため、2～3年に1度は植え替える必要があります。用土は赤土を使用し、元肥と水を加えて攪拌



緑地植物実験所ハス圃場

したものには2～3節分の蓮根を植え付けます。花蓮の蓮根は、食用の品種と比べるとほっそりとした形状をしています。5月上旬には萌芽し始め、初期に展開する葉は水面に浮いていることから「浮き葉」と言い、その後水面から立ちあがって展開する「立ち葉」が出ます。立ち葉と共に出蕾し始め、6月上旬から9月下旬まで花が楽しめます。適時追肥と薬剤散布を行うのですが、ほとんど病気にはかからず、アブラムシやケムシ類に対して殺虫剤を散布しています。特に生育初期の浮き葉を食害するユスリカの幼虫には注意が必要で、ほっておくと後の生育に大きな影響を及ぼすばかりか枯死してしまう危険性があります。生育の後期になると「止め葉」と言われる葉が展開し、その後休眠に入ります。

維持管理と並行して品種のデータベース整備も行っています。ハスは、国内だけでなく、主に中国で広く栽培されている他、オーストラリアやロシア、アメリカにも分布しており、国外の品種も多数存在します。古くから栽培されてきた植物であるため、野生種と品種の境が曖昧になっており、種子で繁殖した個体や導入元の分からない品種については確認が必要です。

例えば、大賀蓮は一重の紅色であるはずが「白色の花が咲いた」などの問い合わせがあります。おそらく自然交雑した種子が発芽して開花したか、ほかの品種と混在して大賀蓮の方がなくなってしまったことが原因と考えられます。このように誤った品種が流通してしまう危険を避けるためにも、品種のデータベース整備は大切な作業になっています。

品種を維持するためには、導入元のはっきりした蓮根を植え付け、種子繁殖を避けるために種子が落ちる前に刈り取るなどの管理が必要です。他の品種が混在してしまった場合は、任意の品種を掘り出して植え替える必要があります。このような栽培上の注意を認識することも大切だと思います。

美しい花を咲かせる花蓮ですが、花卉として栽培した場合いくつか課題があります。まず限られた面積で栽培すると、腋芽があまり生育せず頂芽だけが伸長するため全体的に節数があまりふえません。そのため同時に複数の花を開花させることが難しく、開花時期を揃える事が課題となっています。植え付け時に蓮根を密植ぎみにする、時期を見て頂芽をカットして腋芽の生育を促すなどの栽培法をこれから試してみたいと考えています。

切り花にした場合は、水揚げの悪い事が問題になっています。これは葉に関しても同様で、出荷がとても難しい植物という事になります。また、花卉が開閉を繰り返す植物のためうまく開かず萎れてしまう恐れがあり、適切な出荷方法を確立する必要があります。

鉢物とした場合は、用土が水を多く含んでいるため重くなってしまう事や移動時の衝撃に弱いなどの問題があります。花つきの良い品種もまだ少ないため、育種にも取り組んでいきたいです。

開花日を調査してみると品種によって開花期に差があり、3ヶ月ほど咲き続ける品種から1ヶ月ほどの品種まで様々です。大賀蓮は、早咲きですが比較的花期の短い品種で、そのため花数も少なくなります。このような品種に遅咲きの品種を交配することで花期の長い品種ができないかなど、交雑種の調査を進める事でより花卉として利用しやすくなると考えられます。

ハスには長い栽培の歴史がありますが、まだ花卉としての認識は薄く栽培技術や生態についても不明な点の多い植物です。これから花蓮として広く利用される植物になるよう、努力を続けて行けたらと思います。

これからについて

緑地植物実験所での業務は、温室の管理や観葉植物のレンタルなど、花蓮に関してだけでなく初めて体験する事がたくさんありました。これから出会う業務もまだまだありそうです。植物園や演習林の方と知り合う機会も増え、以前にも増して多くの事に挑戦できる機会を得ることが出来たと感じています。植物について1つでもやり遂げたと思える日が来るように、これからも頑張っていこうと思います。



斑蓮 '大酒錦'

JFTDから消費者への情報発信の場 「フラワードリーム2009 in Tokyo」

JFTD・花キューピット協同組合 常任顧問

石川 君子

JFTD（社団法人日本生花通信配達協会）は、平成21年7月4日（土）から6日（月）の3日間、日本の文化経済の中心地東京から、様々な切り口で花文化を発信しようと「フラワードリーム2009 in 東京ビッグサイト」を開催しました。花業界関係者はじめ一般の方々に広く開放し、約3万人の方々にご来場いただきましたので、開催に至った経緯とその概要を紹介いたします。

1. 開催までの経緯

JFTDは、昭和28年に遠隔地の花贈り事業を行う団体として設立され、日本における花贈り文化の普及、フラワーデザイン技術の向上等に取り組んでまいりました。その後、民間企業等による花贈り事業の普及に伴い、平成13年に生花通信配達事業を公益法人JFTDの事業から切り離し、花キューピット協同組合を設立・移管しました。現在は、公益法人（特例民法法人）として、JFTD学園日本フラワーカレッジを中心としたフローリストの育成、各種競技会や研修会の開催、花育、還暦を赤いバラで祝うハッピーローズなどの新たな花文化の発信等、花き業界の活性化に向けて取り組んでおります。

JFTDの会員は生花専門小売店として花き消費の最前線におりますので、此処10年ほどの、業務用需要、稽

古花、お見舞い花等の大幅な減少や、若年層、特に、子供たちの花離れ・土離れ等の消費動向の変化を身を持って感じ、何とかしなければいけないとの危機感を強く持っておりました。

JFTDの故鈴木雅晴初代会長は、花き業界の拡大・発展のためには消費宣伝が不可欠であると考え、昭和40年代に、生産、市場及び小売の三者一体となった取り組み「千分の一構想」を提唱しました。残念ながら、当時花き業界は成長期にあり、生産及び市場の理解は得られませんでした。しかし、JFTDは、内部での議論を重ね、単独で宣伝目的の会費を徴収し、積極的に宣伝活動を展開することとしました。以来、現在までに二百億円を超える宣伝費を費やして花文化の創造・普及・拡大に努めてまいりました。フラワードリームはその一環として、全国4,000の会員の夢が形になったものです。

2. 会員主役から消費者主役へ

生花通信配達事業は、お客様からいただいた注文を遠くの他の会員店に取り次ぎ、新鮮なお花を手作り手渡しするというサービスですので、会員間の信頼の醸成と技術の向上が必要不可欠です。そのため、JFTDは「親和と誠実」という言葉の下に、56年間に亘り毎年全国大会を開催し、会員の親睦と技術の向上に励んでまいりました。その結果、会員間の素晴らしい絆と世界に誇るフラワーデザイン技術がJFTDの宝として蓄積されました。この宝を活かして、少しでも多くの方々に花の美しさ、楽しさ、癒しの力などを伝える場を作りたいと2年ほど前から構想を練ってまいりました。

丁度、平成18年5月に公益法人制度改革3法が成立し、平成20年12月1日から施行され、「民による公益の増進」が打ち出されたことが後押しとなりました。公益法人の認定を目指すJFTDは、従来の組織及び事業を大きく見直し、会員に限定せずに幅広い参加を求め、花文化の



オープニングのテープカット

普及と花き業界全体の活性化を推進する方向に舵を切りました。



ジャパンカップ作品

3.開催結果

幅広く花き関連事業者、消費者等を対象にした大規模イベントを企画するのは、JFTDにとって初めての経験であり、試行錯誤で担当者は大変苦勞しておりました。結局、JFTD、花キュービット協同組合、株式会社日本フラワー振興協会、株式会社i879のグループ企業あがての実施体制が生まれ、猛烈な追い込みで開催に漕ぎ着けました。

内容については、2009年から2013年までの5年計画で順次充実を図ることとし、初年度はできることから始めることとしました。テーマは「新しい日本の花文化の創造と提案」に決まり、二部門構成としました。第一部は、花文化の担い手の育成部門として、ジャパンカップ、JALCUP、花育ワークショップ、セミナー、人の一生を彩る花の特別展示(全国56の支部から1点ずつ商品提案)、還暦を赤いバラで祝うハッピーローズ・アワードの授与、ジャパンカップの入賞者等によるフラワーデモンストレーション、種苗会社、産地、生産者等による新品種紹介及びフラワーマーケット。第二部は、花文化を支える技術発展として、商品(資材)見本市、プリザーブドフラワーコンテストとなりました。

企画を進めるうちに、オランダ国際球根協会のユリの展示やミズリリーの表彰が併催されることとなり、また、東京農業大学の進化生物学研究所の展示、生き物文化史学会の展示など、内容が膨らんできました。

準備が進む中、皆が不安になったのは、会場の東京ビッグサイトは、交通の便が良いとは言えず、果たして初めてのイベントに皆様が来て下さるのかどうか、ふたを開けたら閑古鳥だったらどうしようと、会長は、夢でうなされたそうです。

当日は、深夜の0時から準備を開始し、一同ハラハラしながら待ちましたが、次々と来場者が並び、定刻には押すな押すなの人垣ができ、開場後も1時間2時間と途切れることなく人並みが続き、感激で言葉が出ませんでした。

4. 主なイベントの内容と結果

フラワードリームの中心イベントであるジャパンカップは、1年間かけて全国の予選会を勝ち上がった86名(店)により、競われました。今年は、他組織にも参加を呼び



プリザーブド優勝作品



花育ワークショップ

かけ、2組織から2名の推薦がありました。来年からはより幅広く、予選会からオープンにしていこうとしています。優勝者には、内閣総理大臣賞が贈られ、5年に1度のグランドチャンピオン大会への出場資格が与えられます。グランドチャンピオン大会で優勝すると、ワールドカップへの出場権が与えられ、出場に際しての経済的支援が受けられます。

JALCUPは、どなたでも参加できるコンテストとして、JALCUP実行委員会の主催で開催されました。副賞の世界中どこへでも行けるペア航空券の効果か、「旅と花」のテーマに293名の応募があり、審査委員長の講評によると、本年は素晴らしくレベルが高かったとのことでした。

JFTD学園が担当した、七夕の花飾りをつくる花育ワークショップは、5回行って、すべて満員で、合計120名の参加がありました。また、花育を進める上での基本的考え方について今西浩子氏のセミナー、花店向けの葬儀、水揚げに関するセミナーも開催されました。

オランダ国際球根協会主催のミズリリーの授賞式にはオランダ大使がご臨席され、その後、会場をゆつくりと回られ、作品の講評や、出展者と意見交換されました。大使の感想は、若い人、家族連れが沢山来場されていて素晴らしい、今後のターゲットは、子供たちというアドバイスをいただきました。

県の経済連のブースでは、3日分用意してきた花が、1時間で売り切れてしまい、急遽市場で仕入れたそうです。埼玉県若手生産者のグループは、将来の顧客を獲得するとのテーマで、管理のしかたを丁寧に説明し、大変好評でした。多少強気の価格設定にもかかわらず、よく売れていました。

花関連資材の「第1回フローラルサプライション(FSS)」

及びFSS主催によるプリザーブドフラワーコンテストが開催されました。大変繊細な作品が多数出品されました。

3日目は、月曜日で午前中だけのため、花育ワークショップも舞台イベントも用意していなかったのですが、朝から続々とご来場があり、急遽、舞台でのデモンストレーションを行いました。販売用の植物も、早々に完売し、ホッとしました。

4. 来場者の反応

今まで毎年会員のための全国大会で見慣れていた作品が、多くの消費者に驚きと感動を与えることを知りました。3日間通われた一般の方も多数おられたようでした。質の高い花文化を発信できたのではないかと少し安心いたしました。

5. 来年へ向けて

心配していたものの、終わってみると予想以上の盛況で、大きな反響をいただき、インターネット上には写真付きで多くの書き込みがなされ、テレビ局、新聞社、民間企業、団体、生産者等から来年に向けての参加や協賛などのお話をいただき、一同安堵いたしました。来年は、7月の3日から5日まで、同じ会場で今年の倍のスペースで開催するよう準備を進めております。是非、皆様のご来場、ご参加をお願いいたします。



ミズリリー授賞式

丸の内仲通りのハンギングバスケット装飾への道のり

— 7年間に経験した7つの提案 —

日本ハンギングバスケット協会常任理事 株式会社グリーン武内 代表取締役
武内 嘉一郎

日本の政治経済の中心地、首都東京の中でもさらに中心的な位置にある東京駅周辺は、最近、大きく変わろうとしています。駅の東側は、百貨店など大きく高級な売り場をもつ八重洲地域です。また、駅の西側は本店機能が多いオフィス街として、三菱グループが主導権を握って開発を進めてきた丸の内地域です。さらに丸の内地域の西側に皇居、南側にニューヨークのセントラルパークに匹敵する日比谷公園を隣接し、政治経済文化の3拍子揃った地域です。

その丸の内エリアを南北に走っている約1kmの「丸の内仲通り」で、重厚モダンなオフィス街から有名ブランドを有するショッピング街へと変身させた10年計画が昨年(2008年)ピリオドを打ち、次なる10年計画が進められています。

まさにその10年計画の前半(2004年)に、今回のハンギングバスケットを使った街路花装飾が可能となったのです。その道のりを説明し、その過程における2003年から2009年の7年間で経験した7つの思い(提案)を書きたいと思います。

第1の提案：ハンギングバスケットマスターへ

日比谷公園ガーデニングショウへの参加 イベントとイベント参加の意味するところ

平成15(2003)年の春、東京ビッグサイトで行われる日比谷公園ガーデニングショウ(以降日比谷公園GSと称します)の第1回実行委員会への参加要請がありました。平成8(1996)年に結成された日本ハンギングバスケット協会(以降JHBSと称します<http://www.jhbs.jp/>)の常任理事として、日比谷公園100周年記念イベントへ花を添えてほしいという依頼です。

JHBSが結成されて7年目にあたり、世の中に、少しずつハンギングバスケットが知れ渡り、花店店頭にはハンギングバ



丸の内仲通りガーデニングショウ施工オープンセレモニー(04年秋)

スケットが飾られるようになり、うれしく思っていました。

バブル崩壊の後、世の中は、花産業も一般企業も含めて、何かをしなければと思いつつも動きがとれなかったような気がします。皆の気持ちは何でもよいから何かをしなければと思っていたのかもしれませんが。翌年の浜名湖花博、翌々年の愛地球博等がきっかけで景気浮上の期待と一般企業が上向き始めたところで、JHBSという協会の看板を立ち上げたにもかかわらず、大きなイベントにはつながっていなかった折りでした。

このイベントに大きな期待をしながら、とにかく参加しようと、JHBSの協力メンバー集めを開始しました。もちろん協会にはイベントを動かすほどの資金はありません。人(JHBS認定のハンギングバスケットマスター)の力を借りるしかないと思い、イベントの持つ意味をしっかりと伝えられれば可能と判断しました。

(思いと結果):自らイベントに参加して、その際の問題解決などにおいて、いろいろと違った角度から自らを観ることが可能になりました。また結果として、街作りという観点からも信頼を勝ち取ることができました。それらを作り上げた時の結束力は、JHBSにとって将来大きな力となるだろうと感じました。個人、協会、企業などの思いを、イベントを通じて外部に伝えることは重要なことと考えます。



石原都知事に日比谷公園ハンギングバスケットショーを案内 (04年秋)

第2の提案：ハンギングバスケットマスターへ

コンテスト出品依頼とボランティア

コンテストとコンテスト参加の意味するところ

JHBSとしての参加内容は、公園の一部の装飾とハンギングバスケットコンテストを行うことと決めました。出品者とボランティアを募るために、全国のハンギングバスケットマスターに対し、会報誌(年4回発行)に掲載して出品依頼をしました。想像以上に早く、多くの応募者を集めることができ、皆がこのようなコンテストを待っていたのが解りました。また、日比谷公園という響きも重要なことであったことは、後に知りました。このような応募方法は、その後のJHBSの運営において重要なこととなっていきます。また、ハンギングバスケットマスターの活動についてもその方向性の一つとして何かが開けた感がありました。

(思いと結果): コンテストは、個人の作品の腕比べに終わらず、その団体、関連協会なども評価を受けます。そして、産業としての提案を具体的に魅せられるチャンスと捉えられました。今後のコンテストは、趣旨とテーマ性を正確に伝えて行く必要があると考えています。

第3の提案：花と緑の関連業界へ

花業界と関連業界の連携を

比較的近い他業界との連携が意味するところ

2003年秋、お陰さまで、あの広い日比谷公園に100点以上の作品が並び、芝生の上を彩りました。

JHBSとしてのイベント参加は、造園界の皆様へのお披

露目の役目もしました。私的な思いとして、他の業界にJHBSの存在を伝えることは重要な意味があると判断していました。その後、実行委員会での席上、常に造園界と仲良くしたいということを発言してきました。もちろん、協会内部に向けてもその意味を発信してきました。そして、造園界からの拍手をいただいた次第です。

(思いと結果): 業界同士の集まり(花業界)に終わらず、近いところの他業界(花と緑の関連業界)と連携することにより、お互いの情報交換ができ、その相乗効果は大きいと考えられます。第3者(消費者)からは同業者と思われる事実を知ると、その連携がないことは、もったいないと考えます。

第4の提案：大手企業へ

丸の内仲通りガーデニングショウを開催

大手企業など他業界と連携するところの意味

本来、100周年記念イベントで終わるはずでしたが、ある程度成功に終わると、もう1回執り行いたくなるという人間の心理があります。各業界からの声で、第2回日比谷公園ガーデニングショウを行おうということになりました。フラワー&グリーン関係者の勢い、夢のもつ力はすごいものでありました。勢い、JHBSも参加を表明し、第2回ハンギングバスケットコンテストなどの企画を決定しました。

しかし、実行委員会には予算がないということに気がつき、各位がいろいろな方面から協力金、協賛金などを集めるようにということになり、私もその一翼を担わなければならなくなりました。

たまたま東京都のオブザーバーとして小口健蔵氏(千葉大学園芸学部造園学科48年卒)が、私に、三菱地所



丸の内仲通りガーデニングショウを飾るテーマガーデン (04年秋)



丸の内仲通りを飾る
ハンギングバスケット(06年秋)

(株)さんへの窓口を作るから、何か提案書を作るようにと言われ、考えたのが現在の「丸の内仲通りガーデニングショウ」です。

丸の内仲通りでのイベントを創りあげ、その資金の一部を日比谷公園ガーデニングショウに援助を願うということです。当初、私の知り得る限りの花関係者に声をかけ、できうるものを羅列整理してプレゼンし、

そのうち500万円を日比谷へという構図を描きました。

結果、1週間後には答えが返ってきました。たぶん、三菱地所さんは今回のようなイベントを待っていたのだと思います。提案書の規模に比べ、実際は小さくなりましたが、イベント開催が決まり、そのうち100万円を日比谷へ援助するということになったのです。500万円が100万円になったとはいえ、その金額は大変ありがたいものでした。

しかし、私には、日比谷でのイベントと同時に、丸の内仲通りでイベントをするという課題が増えました。

(思いと結果):花緑業界ではない他業界への提案には、大変な努力とチャンスが必要と考えられます。そのためには、少しでもアンテナを伸ばし、そのチャンスを逃さず、そして、そのチャンスがきたときに、必ずお互いの利益が出るように、よいところを見せられるように、常に準備が必要であると思います。



丸の内仲通りガーデニングショウのテーマガーデン(06年秋)

第5の提案：自分自身へ

150基以上のバスケットを展示

開花調節、量と質のバランス、メンテナンスなどへの新しいチャレンジが意味するところ

2004年秋、第1回丸の内仲通りガーデニングショウと第2回日比谷公園ガーデニングショウの同時開催ということになりました。とくに丸の内仲通りにおける展示内容は、1kmに及ぶ仲通りの街灯をハンギングバスケットでいっぱいにするのと、仲通りの歩道を使ってメインガーデンとガーデンコンテストを行うこととしました。

西武ドームで行われている「国際バラとガーデニングショウ」(私も初めからハンギングバスケットコンテスト審査員、企画者として参加し、今年で12回目になります)のガーデンコンテストが屋根つきドームの中でのガーデンということに気になっていました。

街の通りを利用してのガーデンコンテストは初めての試みであることと、全国でも1~2位の地価(ちなみに仲通りは坪単価2億円位です)という場所でガーデンを作るという夢のような話が実現することで、心躍るイベントとなりました。

メインガーデンの作者は、浜名湖博で審査委員長であったジュリアン・ドール氏にお願いし、丸ビル脇に製作していただきました。さらにガーデンコンテスト作品を一般から募集し、1次の図面審査を通過した中から15名の作者に実際にガーデンを造っていただき、2次審査をします。

一方、仲通りにハンギングバスケットをつけることについては、コンテスト形式がよいかプロにお願いするのがよいかということで、悩みました。コンテスト形式にして、150基以上のいろいろな作品が仲通りに並ぶということが、洗練された仲通りのイメージに合うかどうか? 結果、私が責任上、製作、取り付け、メンテナンスを引き受けました。もちろん、私にとっても初めての大量の大型作品を一晩で飾るので、その覚悟と緊張は大変なものでした。以下にその時の主なハードルを整理してみます。

①ハンギングバスケットの植栽内容を図面で起こす

- 仲通りにある重厚モダンな建築物との調和を図る。
- 何度も歩いて考える。

②植物の選択基準と植え込み

- スタートから最終日までのイベント期日に合わせた開花調節とその製作技術の確立。

→ 多めの作品作りと多彩な組み合わせ。

③搬入前管理

→ 長く垂れ下がる作品の管理(ハンギングバスケットの宿命である)。

→ 農場の一部にハンギングバスケット専用の棚を作り、自動灌水設備を取り付けるなど、弊社の仕組みをかなり変えました。

④搬入方法

→ 作業時間はPM9時～AM6時という制約とイベント準備期間2日間。

→ 事前フォーメーションを作り綿密な計画を立てる。

今思えば、初めてのことばかりでした(これらのことをコンテスト形式で行えるかどうかで悩みましたが、結果としては、正解であったと信じています)。おかげ様で、三菱地所の役員の皆様からの拍手を受け、イベントは成功に終わりました。もちろん、日比谷公園に対しての100万円はありがたかったことです。

(思いと結果): 論より証拠、まず、始めることが肝要と考えます。そして、完成図をイメージして、何度も足を運ぶことと思いました。営業から始めて、生産者の技術・経験、関係者との連絡、製作施設の準備、段取りなどを駆使して、仕事を完成する満足感はひとしおです。企画会社などでは経験がないことを生産者が行うことで、クライアントへの直接セールスができました。

第6の提案：大手企業へ

ハンギングバスケットによる花の街作り

花力の凄さを認めてほしい

日比谷公園ガーデニングショウと、丸の内仲通りガーデニングショウ、2つの関係を明確にするために、全体を「東京ガーデンジュエリー」と銘打って、同時開催イベントとすることとしました。

2004年、第1回東京ガーデンジュエリーの実行委員には、両ガーデニングショウの委員長と副委員長の4名と関係機関4名、熊谷教授(当時東京大学教授)に実行委員長になっていただき、晴れてスタートしました(私は、丸の内仲通りガーデニングショウの副実行委員長として参加させていただいています)。

この東京ガーデンジュエリーも今年で6年目を迎えており



春のイベント丸の内
フラワーギャラリーにて(07年春)

ます(09年10月23日(金)～11月1日(日))。また日比谷公園ガーデニングショウ(09年10月24日(土)～11月1日(日))は、今年で7年目です。「丸の内仲通りとその周辺のURBANエリアと、日比谷公園のPARKエリアという2つの会場の空間特性を活かし、まさに宝石のように緑や花で街を彩る

イベント」というのは今年のパンフレットから引用したのですが、それぞれ特徴のあるガーデニングショウとなっています。

丸の内仲通りガーデニングショウについて、以下のホームページをのぞいてください。日比谷公園ガーデニングショウにもリンクできます。

(<http://www.mn-garden.com/>)

丸の内仲通りのハンギングバスケット装飾への思い

2つのガーデニングショウの経緯は前記した通りですが、弊社(株)グリーン武内は、三菱地所(株)から仲通りイベント以外に、年4回の装飾依頼を受けるようになりました(これまで合計6回、1回に2～4週間飾ります)。追加の発注が来たということは、三菱地所(株)の皆様が、ハンギングバスケット装飾が街作りに必要だと思っていただけたことだと思います。



日比谷公園ガーデニングショウの
ハンギングバスケットとコンテナガーデンのコンテスト会場(09年秋)



街路樹の間のハンギングバスケット（09年秋）

などに変わろうとしている三菱地所(株)長期計画に対して、花の効果(花力)を認めていただいたと思っています。

具体的には、1kmという長い街並みにある街路樹とハンギングバスケットとの共生、色のある風景、変化のある花、立体感のあるハンギングバスケットは、三菱地所役員をはじめ、オフィス街で働く人たち、そこを通る人たちに安らぎを与えていると企業は判断したのだと思います。

（思いと結果）：これまでの10年間、ハンギングバスケットや花そのものにこだわってきたこと（壁面装飾でも花にこだわっています）が報われたことは、うれしいものです。儲からない花産業、ゼネコンにおいしいところを横どりされてしまう産業、などといわれ、残念に思っていました。私たちが思っている以上に世の中に花の力を感じてきている人たちがいると信じ、さらなる街の花装飾を実践していきたいと思っています。

第7の提案；未来へ

6次産業から10次産業へ

次なる仕掛けとして花産業は何をなすべきか？

私にしてみれば、「東京で一旗あげたい、東京に花を飾りたい」という夢が実現するとともに、その効果が思った以上に大きいという自信になりました。コンテナガーデン（寄せ植え）の一つであるハンギングバスケットで、花の力が発揮できたのであれば、大変幸せに思います。

今年もまた、仲通りに大きなビル(三菱パークビル、平成21年9月2日)が完成しました。そのお祝いにハンギングバスケットも参加しました。花業界の発展のためにも、消費拡大のためにも、そして何より、人々の心が花によって癒

されることを望みながら、次なる仕掛けは一体何なのか？ あまり、気負いをせずに、花力を信じて、生産者としての心構えを強く持って行動したいと思います。

（思いと結果）：花は、単体の美しさ、集合体の美しさ（コンテナなど）、背景による美しさ（街の中の花）の違いを明確にして生産し、それらの使い方を知ることが重要と考えられます。

また、時間軸による差、資金軸による差、効果軸による差など、花産業が必要とされる場面は多方面にあり得ることを確認し、使い分ける必要があると思っています。今、生産者としての企画力が問われていると思っています。私は、それらを10次産業と呼びたいと思います。1次の生産、2次の加工、3次の販売、4次の企画を足し算すると10次産業、すべてを兼ね備えた産業を目指します。



ハンギングバスケット展示を支える(株)グリーン武内農場（09年）



出番を待つハンギングバスケット（自社農場にて）

私の生まれた頃の東京郊外の風景に読む 日本の花産業史

田 中 桃 三

私の生まれたのは東京府品川区だが目黒不動尊の近くにあり、家の前の道を隔てたところが旧林業試験場（現在林試の森となっている）であった。

私の生まれた昭和10年頃は、東京の郊外として発展を始め、東急の目蒲線、東横線も開通し沿線の住宅地にも急速に家が建ち始め、落ち着いた頃であった。この話は、私が生まれた頃から、20年後、大学に在学中ぐらいまでのことをまとめてみた。

その間社会の変化はいうまでもなく大変なもので、太平洋戦争の勃発、終戦と揺れ続けた。私たち子どもは7～8歳までは比較的平穏な暮らしであったが、その後は疎開、戦災、食料難などが立て続けにやってきて、転居だけでも10年間に5～6回、転校も3回経験している。

小学校（当時は国民学校といった）入学前後頃はもっぱら家の前の林試で一日を過ごしていた。林試は点在する研究室を各種の木が取り囲んでいたから、カブトムシやクワガタもたくさんいたし、遊ぶことに不自由はなかった。

家から子どもの足で歩いていけるとところに目黒不動尊があったが、その境内で遊ぶのも日課であった。

不動尊では毎月28日が縁日で、露店が多く出てにぎわっており、家族に連れられて夜店を見て歩くのは楽しかった。そのなかに植木屋がいたことは今でも記憶している。木の台の上にマツ、モミジ、キク、ホオズキ、アサガオなど、季節の鉢植えをならべて売っていた。ちょうど広重の浮世絵にあるような風景が残っていたのである。

もっともこの時代、園芸店もガーデンセンターもない



玉川温泉村の今。バス停に名が残る

頃であるから、鉢植えを手に入れるにはこのようなところで買うより他はなかったのである。

その時、私は8歳ぐらいであったが、一回の縁日の小遣いは50銭（0.5円）なのでさすがに鉢植えは買えなかった。だがどうしてもほしくなり、数ヶ月小遣いをためてようやくモミジの鉢植えを買った。5号鉢程度だったと記憶しているが、大切に育てていたのに、2年後の空襲で家と子どもすべて灰になってしまった。

もともとこのあたりから多摩川下流の河川敷にかけては野菜、果樹など園芸が盛んな地域で、花も栽培されていた。

関東大震災（大正12年）以後、電車が敷かれ、郊外の新興住宅地として急速に開発が進んでいた。震災後10数年たったその頃は、駅を中心にした、洗足、田園調布、成城などの住宅地が落ち着きはじめ、その周りの畑では野菜作りがおこなわれており、温床による野菜の促成栽培や室（むろ）を利用した枝物の開花調整なども行われていた。



とどろきバラ園（野村和子氏提供）

玉川温室村

最寄の駅から郊外電車で10～15分で田園調布、多摩川園（現在多摩川駅）に着くが、多摩川園駅には遊園地があった。そこでは菊人形展なども秋になると開催され、結構にぎわっていた。

駅前から5分ほど歩けば多摩川で、上流に向かって歩きはじめると急に展望が開けて土手の右側にはそのころ珍しいガラス温室が点在していた。現在は温室は1軒もないが、バス停に玉川温室村の名が残っている。

私は4～5歳頃から、父に連れられ多摩川園から二子玉川までの約4キロをピクニックするのであったが、年に2～3回は行っていた。そしてたまには何箇所かの温室へ寄ったのであるが、どこのお宅か記憶にない。後で父が撮影した写真を見る（今回探してみたがついに発見できず）と、犬塚卓一氏のカーネーション温室を訪れていたようである。また家族で一面がチューリップの畑の中を歩いている写真もあった。あとで伊藤東一氏の元従業員の方にうかがったが、戦前売れ残った球根を土手の向こう側に大量に植えたことがあったそうで、たまたまそれを見たのかもしれない。

この温室村は、先ほどのカーネーションの犬塚氏をはじめ、最盛期には30名以上の園芸家が集まり、温室総面積1万5千坪に及ぶ洋花の生産地であった。

私が見たのは、犬塚氏がアメリカより戻られて温室を作られてから15～16年経っており、このあと数年で太平洋戦争により壊滅的な状態になるまでのもつともよいときを見ていたのかもしれない。

温室村の発案は森田喜平氏の発案であったそうで、

森田二項園はカーネーション、洋蘭などを栽培されていた。森田氏のバラ栽培は戦前の一時期、東京の需要の主要部分を占めていてほどであった。

また先ほど話しの出た伊藤東一氏は、園芸学部卒業だが、外国産の園芸植物の導入紹介と品種改良、日本での栽培法の確立など、多方面にわたって活躍された人で、昭和初期の花卉園芸界にとって忘れられない人であろう。特にハナショウブについては多くの新品種を作出され、他にもキク、ダリヤ、スイセン、グラジオラスなどの新品種の作出もされている。

そのほか、荒木石次郎氏は温室村の草分けの一人で、スイトピー、カーネーションなどの切花栽培をされていた。

昭和10年代の園芸事情

以上は私の幼時の記憶に、当時のことを調べられた湯尾敬治氏の著書によるところが多いのであるが、ついでに、その本にしたがって、昭和10年代の世田谷区、大田区、川崎市北部の園芸事情を紹介してみよう。なお、温室村は大部分が大田区であり、一部が世田谷区になっている。

温室村から多摩川を背中にまっすぐ歩き、8間道路（現在環状8号道路）を横断し、大井町線の線路を渡ると、当時できたばかりの「とどろきバラ園」があった。わずか150坪のバラ園であるが、園主は後年バラのブリーダーとして世界に知られるようになった鈴木省三氏であった。

彼は太平洋戦争中もバラの栽培をやめることなく守り通したのであるが、昭和34年京成バラ園に移るまで、数多くの名花を作出したところである。

この場所は世田谷区奥沢町だが、隣町には早川源蔵氏がいた。私は昭和20年代の初期、早川さんの近所に住んでいたことがあるので、何度かお屋敷に伺ったことがあるが、広大な庭に寒蘭、君子蘭、山草類、盆栽など、たくさんの鉢植えがあったことを記憶している。早川氏は大正から昭和初期にかけてのこの地区の園芸関係者の指導的な方で、世田谷花卉園芸組合、大日本園芸組合などの設立にも深くかわかり、玉川温室村の開村にも主導的な役割をされているのである。

多摩川の温室村より上流になるが、下野毛に桜井元氏がおられた。桜井氏は栽培家でもあり、研究家でもあったので、欧米よりの種子の導入増殖などを通じて

園芸界に貢献された。著書もあり、戦後は原種の保護に情熱をそそいでおられた。

二子玉川を越え、砦には小杉喜四郎氏がいた。小杉清先生の父君である。小杉家は目黒柿の木坂の名家であり、当初は目黒で栽培を始められたのであったが、昭和13年、この砦に温室を建設したのである。敷地2900坪、温室820坪で、バラ、カーネーション、ユリなどを栽培されていた。現在でもこの近在の老人に小杉先生の話をすると、「あの砦の温室屋さん」との答えが返ってくるほど、知られた存在であった。

この他にも、たくさんの方々がこの地におられたが、周囲の大田区馬込区はバラ、カーネーションの温室栽培がさかんであり、戦後もキク、ユリの切花栽培の名人が競っていた。また多摩川を渡った川崎地区も、戦前から戦後にかけて、さらに今にいたるまで、パンジーなどの苗生産、シクラメンの鉢物、花桃などの枝物の産地として盛んであった。

都立園芸高校

この城南地区の園芸が盛んになった理由はもちろん大消費地の近郊であったこと、土地が水田に適さず江戸時代から野菜の産地として盛んであったことなどがあるが、明治41年創立された都(府)立園芸学校と、数年後に開設された三井戸越農園を忘れることはできない。

都立園芸高校は戦前は全国から生徒を募集し、優秀な教員のもと数多くの園芸人を育てあげた。特に花卉の石川保太郎先生は50年の長いあいだを勤められ、特に小菊や江戸菊の栽培保存に力を入れられ、数多くの新品種を作出されており、懸崖菊の見事さは類を見な

い出来であった。

先ほどのべた鈴木省三氏、早川源蔵氏、小杉清先生などもそうである。

三井戸越農園は三井財閥が設立したものである。当初は営利目的ではなかったが、昭和9年用賀に移転し、洋蘭やユリなどの営利栽培を始めた。ここで育った人々には、森田氏をはじめ、初期の温室村の建設に力のあった方々も多い。昭和20年代後半だと思うが園芸学部の先輩である清水基夫先生が園長のとき、高校生の私が伺って、いろいろ教えていただいた覚えがある。

ここまで、私の記憶と2、3の参考書によって書いてまいりましたが、なにせ70年近く前のことですので記憶違いなどで、間違いやご迷惑をおかけした内容もあるかも知れませんが、その点をご容赦願います。



都立園芸高校正門のイチョウ並木道は昭和のはじめからという

	植物分類表 大場秀章 編著 B6並装 538頁(予定) 定価3,500円(税込) 分子生物学的知見にもとづく最新の植物分類体系を日本で初めて紹介。日本産野生種、主要な帰化種や栽培種など、約2400属12000種余を470科に分類。リンネに始まる植物分類体系変遷の詳細な歴史を、主要分類表とともに附す。索引項目数23700余。	日本の帰化植物図譜 日本植物図鑑倶楽部 編 大場秀章 監修・解説 A4上装 332頁(内カラー200頁) 定価9,800円(税込) 海を越えて渡来・野生化した、最も身近な植物を精緻なボタニカルアートで紹介。収録種200。帰化植物研究の歩みを附す。	サクラ図譜 川崎智也 監 / 大場秀章 編 B4上装 224頁(内カラー64頁) 定価25,000円(税込) 第一級のサクラ研究者だった故著者の未完表彩色画・精密な図解全90点、および記載文を収録。詳細な注釈と解説を附す。
株式会社アブック社 e-mail info@aboc.co.jp http://www.aboc.co.jp/ 〒247-0056 鎌倉市大船2-14-13 Tel 0467-45-5119 / FAX 0467-45-6591			



小 泉 力

温室栽培研究室として発足し、研究員は室長（岡田淳氏20年卒）と私の2名であった。

その頃、県の農業行政首脳部のある人は「花は房州の切花があればいいじゃないの」というような見解で、園芸作物とは果樹、野菜であった。この考え方は当時としては普通のことで、まして鉢物生産がこれほどに伸びるとは予想もしていなかったであろう。そんな中で鉢物や施設園芸が発展すると予測した森田場長の卓見と英断はさすがに園芸学部出身の方である。

その後植木ブームが起きて鉢物と植木を研究するとして花植木研究室となった。千葉県の花き研究は安房分場が独立して暖地園芸試験場となり、花き研究室が切花を担当し、県南は切花、県北は鉢物・植木という体制となった。

また、県の花卉行政を担っていた人に県園芸課で花植木係長だった大綱昇氏（昭和32年卒）がいる。氏は花卉専攻で県庁内での専門家として房州の若手生産者と強い信頼関係を持ち、千葉県花卉連研究部を率い、林角郎氏と共に花卉振興を盛んに行った。これが千葉県花卉生産者5000人余の牽引力となり房州を中心とした切花の産地振興に資するところが大きかった。

球根ベゴニアについて

私が試験場に赴任した頃は県内に鉢物生産はほとんどなく、千葉農試も同様であった。当時の先進地は東京都や愛知県、奈良県で、鉢物研究は地方農試が盛んで、東京都の鶴島久男氏（23年卒）、工藤忠氏（26年卒）が関東ブロックでシクラメン他の研究をリードしていた。

そんな中、少ない栽培事例を見ながら手探りでシクラメン、シネリア等で栽培試験を始めた。良いシクラメンを作れば高く売れたが、用土がブラックボックスであった。各県の新人研究員が取り組むテーマは、農家の悩みが用土であったから、用土と肥料の試験が多かった。

昔も今も同じだが、新商品が出来てヒットすればそ



球根ベゴニア 日長時間が生育・球根肥大に及ぼす影響

の生産は伸びる。花は新しい種類、品種が登場すると人気が出る。花の研究の一つは新しい花卉の開発にある。私が選んだ新しい花卉は球根ベゴニアであった。戦前には美しい花として知られていたが、戦後は江戸川分場の田中氏が研究していたくらいだった。

教育大学農学部で岡田正順先生（14年卒）が学会で電照栽培で早出しが出来ると発表したの、自分もその実用化を目指した。球根ベゴニアは長日性植物として知られ、秋から冬を通して電照栽培すると早春から開花する。電照方法についていろいろ調べたが、日長時間によって生長と休眠の関係が劇的に変わり、開花や球根肥大にはっきり現れるので、この研究が一番面白かった。その当時長野県辰野町吉江晴朗氏の良い系統があり、この品種を用いたので美しい大輪の花が見事に咲いた。

千葉県内の鉢物生産者にとって、オリジナル商品だったので一気に普及した。しかし、早く出した方が得だと、寒さが厳しい3月初めから早出し出荷する人が出て、数年で人気落ちてしまった。

その頃、リーガースベゴニア（エラチオール）が導入され、球ベゴの生産者はこれに転換した。エラチオールは球ベゴとの交配といわれ、日長反応などに共通性があり、開花習性も似ていたので栽培のコツが理解できたせいか、千葉県はいち早く主産地となった。

雑談的で恐縮であるが、球根ベゴニアの開花調節の



球根ベゴニアの花

研究はその後だれもやった人はいなかったと思われるが、思わぬところでこの花が目目された。何年前の事だったか、2月某日のテレビで日本海を隔てた国の将軍様の誕生日の花として紹介されていたのは、なんと真っ赤な大輪の球根ベゴニアだった。この季節にこの花を咲かせるには温室で加温し電照栽培しなければ決して花を見ることはできないはずである。そのためには施設、暖房、電照、技術、品種が揃わなければならない。貧しいといわれる彼の国で技術者はどのようにして栽培しているかと思わずにはいられない。

専門技術員の仕事

千葉県は東京に隣接し立地が良かったので、鉢物は新産地としていち早くその地位を占めた。若い生産者は愛知県、神奈川県などの先進地に研修生として2年間の修行をして帰り、生産を始めたが、親の反対を押し切って始めた例が多かった。今になると夢のような話だがみんなが儲かってどんどん規模拡大ができた。

また、千葉県では生産者組織が早くから出来て活発に活動したのが技術向上に役立った。その裏には県の普及組織の指導がある。新技術は専門技術員（専技）が普及員を指導して農家に普及する体制であった。当時は全国的にも花きの専技は少なかったが、千葉県はシクラメンの権威者として知られていた第一園芸の樗木忠夫氏を招き、氏の指導で県内の鉢物が盛んになった。特に若い生産者を組織化して、鉢花生産者連絡協議会と観葉生産者連絡協議会の2組織を立ち上げた。これにより各郡単位の支部組織ができて自主運営の活動が

行われた。運営には事務局が必要で、これを花き担当の普及員が受け持った。このシステムは非常によく機能し、若い生産者の交流をはかり技術を向上させたと思う。

しかし一つ困ったことがあった。即ち普及員は地域を担当し、その区域の農業を指導するのが決まりで、鉢物生産者は県内各地に分散しているので管轄外の農家は指導できない体制があった。

そんな問題を抱えながらの鉢物産地指導があった頃、私は昭和58年専技になった。専技の仕事は技術指導だけでなく、連絡、調整等多様である。そこで事務局は生産者組織の会長が所在する地域の普及所長指導の下で花の普及員がやることにした。もともと正式なものではないが、これにより花の普及員は千葉県全体の鉢物生産者を指導でき、生産者も情報交換し合い、共に発展してゆく組織となった。その後もこの組織は発展し、他県に無い活発な活動を展開して今日に至っている。

千葉県の洋ラン生産者は県全域に分散していたが、洋ランも組織化の機運が起こり、東金市の土屋修三氏（昭和36年卒）が千葉県洋ラン生産者組合として組織化し、事務局は県園芸課が担当した。

試験研究と専技

洋ランについては花植木研究室の遠藤宗男氏（38年卒）が試験を行った。土壌肥料が専門だったが当時洋ランを水耕栽培で研究していて、コチョウランの根が水中に伸びて開花しているのにはびっくりした。

その頃千葉県ではゴルフ場の農業が問題になり、時の沼田武知事から千葉県のゴルフ場無農業宣言が出た。急遽農業試験場で芝の研究が始められ、花植木研究室室長の遠藤氏がその総括責任者となり、芝生研究の先駆けを担った。

農試の鉢物研究ではシクラメンの培養土の研究で斉藤俊一氏（平成3年卒6年博士課程）は浄水土を活用した用土を実用化し、商品化に到っている。

一方、千葉県の切花研究は先述の林角郎氏が暖地園芸試験場で一貫して行って来たが、アイリスの燻煙処理による開花調節を初めとして、房州で栽培されてい

る切花、花木のほとんどを手がけている。堀川照男氏（専攻科花卉43年修了）は、新しい研究課題として当時その性質がよく分からなかったグロリオサやサンダーソニア等を研究し、普及した。その後専技として県庁に移り現場を良く知った専技として活躍した。

私の専技期間は昭和58年から10年間であったが、専技は新技術をいち早く普及員に伝える必要上、試験研究の関東ブロック会議や全国会議などにも参加したが、そこでは研究職出身者も多く、千葉大園芸学部出身の林角郎、工藤忠、村井千里等の先輩方や同窓生が活躍しておられた。

県庁退職前の役職で平成5年暖地園芸試験場に行ったが、当時から農業生産も頭打ちとなり、これまで研究テーマとしてはタブーだった観光農業をテーマとして取り上げた。これも地元の園芸振興には必要と考えての判断であった。

退職後に経験したこと

退職後は千葉県地域整備協会に再就職した。ここは千葉県が造成した海岸埋め立地、幕張メッセ、県立公園の緑地管理等をしていた。因みにこの協会は設立当時、先述の森田三良氏が理事長で、自ら樹木を植える段階から指導し、基礎を創られたと聞いている。

ここでの庭園樹や花壇の管理は初めての経験だったが大変勉強になった。庭園樹は植え付け当初は良いが年月と共に繁茂して管理が難しくなるなど問題が起こってくる。幕張メッセで思い出すのはカナールのアオコだった。下水の再生水を使っていたのでNPが含まれ次亜塩素酸ソーダを撒いても直ぐに発生した。設備を作ったクボタの技術者といろいろ検討した結果ようやく抑えることができて、今行っても澄んだ水になっているのがうれしい。

協会在籍中の平成7年に千葉県で緑化フェアが行われ私も参加した。この時のテーマに「懐かしいダリア」と題してダリアをとり上げた。提唱者は川上幸男氏（25年卒）で、呼び物に皇帝ダリア（*Dahlia imperialis*）を小石川植物園から分けてもらい植えた。ところがこのダリアは短日性植物であり会期は8月から10月25日迄、植えただけでは会期中に咲かないのは明らかである。そ

こでデータはないがぶっつけ本番で短日処理をした。大きなやぐらを建てて黒幕で朝夕開け閉めして2ヶ月。閉会の3日前にやっと咲いた。

ダリアでは育種家の小西勇作氏（31年卒）と黒相淳氏が県内在住でダリアコーナーを設け花を添えた。その時小西氏が出品された鉢植の巨大輪の数々は見事だった。現在も千葉市内で卒業以来ダリアを育種し、世界的名花を出している。

この協会を定年退職後は個人として好きな花や植物に関わる仕事をしたいと思っていたが、幸いにも緑の相談所や園芸相談の仕事に従事し、この間に一般市民の花に対する気持やニーズを知ることができた。

4～5年経った時に同級生でサカタの野口博正君（35年卒）から専門学校で花の教師をやらないかと誘いがあった。場所は神奈川県藤沢市で自宅からは遠かったので単身赴任で行くことにした。そこは「日本ガーデンデザイン専門学校」で花卉の授業と実習を受け持ったが、教育は初めての経験で戸惑うことも多かった。種子まきから育てる栽培はスコップと鍬での手作り園芸で、学生と共に自分の学びでもあった。この学校には園芸学部同窓生の高橋雅雄氏（造園28年卒）、篠田朗彦氏（造園37年卒）、今西弘子氏（総農38年卒）、山田幸子氏（44卒）、武内嘉一郎氏（51年卒）が講師として活躍されていた。

この学校は造園を教えていたので自分も庭に関心が高まった。花を育て庭に活かすことをもっと学生に体験させたいと思い、フラワーガーデンを試みたりして、老骨の4年間の勤めを終えて、昨年自宅に戻った。

今思うと纏まったことは無かったが、花一本の道だったのが幸せだと思っている。花と緑には面白いことがいっぱいある。これからもずっとやり続けようと思っている。

終りに、この文を書いてみて多くの園芸学部同窓の活躍があり自分が支えられて来たことを改めて感じた。名前を上げられなかったが、ご指導を受けた各界諸氏に感謝致します。

キョウチクトウ

(学名： *Nerium oleander* L.)

岐阜県立国際園芸アカデミー 上 田 善 弘



周辺の地中海沿岸独特の風景と植生

この写真のキョウチクトウを見て帰国後、書籍で調べるまでお恥ずかしながら、私自身は普段見るキョウチクトウはインド由来のもので、モロッコにも野生があるとは思っていなかった。その場所はモロッコの最も東、アルジェリアとの国境に接した、ウジュダ・アンガット府ウジュダ市郊外の自然植生地である。車で案内していただきながら、どこにでもキョウチクトウが見られるので、植栽されたものと思っていた。ところが、調べてみると地中海地域から中国にかけての季節によって干上がる川床や川辺に自生するとある。

まず、なぜモロッコに出かけることになったかから始めたい。一昨年、当県の古田知事がモロッコのウジュダ・アンガット府(県)を訪問し、地方自治体同志の交流を行うという覚え書きを交わして来られた。もともと古田知事は前職外務省にて中東アラブ圏との繋がりをもっておられ、駐日モロッコ大使と親しいことから、このモロッコ大使の故郷、ウジュダ・アンガット府と交流を進めることになった。その交流の第一歩として、当国際園芸アカデミーにウジュダ・アンガット府から研修生を受け入れることになり、具体的な進め方等について交渉するため、昨年モロッコに出かけた次第である。

モロッコは北アフリカに位置し、南にはサハラ砂漠が迫ってきている国でもある。そのため、砂漠の北進を食い止めるための対策を急務としており、今回の研修生の主たる研修テーマも緑化技術の取得にある。

モロッコ滞在中には、府の環境部門の職員、技術者との情報交換、都市公園、自然公園、緑化植物の苗圃、ごみ処理施設などの視察が組み入れられていた。この視察の途中で、ウジュダ市郊外の自然植生を見る機会が得られたのである。

車窓から見えるのは典型的な乾燥した地中海沿岸地域の風景、植生そのものであった。樹木はオリーブに代表される葉の硬い、広葉樹を主とする。そんななか、干上がっている川に沿ってキョウチクトウが群生していた。まさに上述の書物に記載されている通りであった。写真のキョウチクトウは道路わきに生えていたものである。このようにして、道路沿いにも点々とキョウチクトウを見ることができた。この植物は、耐暑性、耐乾性が強く、しかも大気汚染にも強いと、都市の街路樹としてずいぶん使用されているのは周知のことである。実際の自生地を見て、その性質を納得することができた。

さて、私がキョウチクトウの故郷をインドと思っていたのにはそれなりの理由がある。キョウチクトウにはかつて、*Nerium indicum* の学名が使われ、*Nerium oleander*の方がセイヨウキョウチクトウと呼ばれていた。まさに、その学名から「インドの」ということになる。現在は*Nerium*属は一属一種とされ、*oleander*のみ一種である。インドのものは地域変異ということで、*N. oleander* var. *indicum*と一変種として扱われることもある。ちなみにキョウチクトウはオレアンドリンを主とする有毒物質を植物体を含み、生葉1枚で致死量があるとされている。



キョウチクトウの花のアップ

花の芸術家たち①

安 藤 敏 夫

千葉大学園芸学部創立100周年記念事業の一環として、「花の芸術家たち」というポスターを作製・展示しました。卒業生の育種成果を選んで紹介したのですが、これを機会に、育成品種の正確な情報を書き残しておきたいと思います。今回、紹介できない方々については、追って紹介して行きたいと思っています。

伊藤 敏夫	品目名	1932年、長崎県長崎市生まれ	
		日本での名称	英名での名称
品目名	シリーズ名	タキイ種苗株式会社	
		品種名	育成者
パンジー	インベリアル	ブルー	伊藤敏夫
ダイアンサス	スノーファイアー	Imperial Carpet	Blue Snow Fire
ジニア	サン	レッド	Red
パンジー	インベリアル	オレンジプリンセス	Orange Princess
ジニア	サン	ゴールド	Gold
ラナンキュラス	ポットワーク	Pot Dwarf	White
ストック	ホワイトワンダー	Wonder	White
ジニア	ワンダー	ドリームランド	Alto
ダイアンサス	テルスター	Telstar	Alto
ジニア	サニー	Sunny	Alto
ダイアンサス	テルスター	Telstar	Alto
ダイアンサス	テルスター	クリムゾン	Alto
セロシヤ	キャッスル	Castle	Alto
ダイアンサス	カラマジンパン	Colour Magdan	Alto
ニルンベルギヤ	モンテブランコ	Monte Bianco	Alto
ジニア	ブラランド	White	Alto

羽毛田智明	品目名	1950年、長野県信濃市生まれ	
		日本での名称	英名での名称
品目名	シリーズ名	タキイ種苗株式会社	
		品種名	育成者
パンジー	インベリアル	ゴールドプリンセス	Gold Princess
ヒヤドリ	ロース	Big Smile	Thicksta
カンナ	トロピカル	Rose	Thicksta
ヒヤドリ	サンリッパ	Sunrich	Thicksta
ヒヤドリ	ペビー	Jewel	Thicksta
パンジー	インベリアル	フロートローズ	Floaty Rose
スノークワイム	ミッド	Milton	Thicksta
スノークワイム	ミッド	Mix	Thicksta
パンジー	オールド	Nature	Thicksta
デルフィニウ	オールド	Aurora	Thicksta
ヒヤドリ	ビビ	Geri	Thicksta
ベサニヤ	ピンクモーニング	Opera isgreen	Thicksta

[illegible][illegible]

品種名	サンリフワウーズ株式会社 日本での名称		育成者		近交での名称		Breeder	育成年	販売年
	シリーズ名	品種名	全谷種芝 村上隆之	育成者	Series Name	Cultivar Name			
カリブアコア	ミリオネル	ホワイテ(サンベル 水)	全谷種芝、 村上隆之	Milken Bells	White (Sarbelite)	T Kanaya, Y Murakami	2001	2003	
カリブアコア	ミリオネル	シフォンブルー (サンベルラプ)	全谷種芝、 村上隆之	Milken Bells	Lavender (Santoo Hapu)	T Kanaya, Y Murakami	2002	2004	2006-2007 ジャパンフワワーセレクション入賞
カリブアコア	ミリオネル	プラサピンク (サンベルマク)	全谷種芝	Milken Bells	Fiori-09 (Sunbell-mak)	T Kanaya	2003	2008	2006-2007 ジャパンフワワーセレクション入賞
カリブアコア	ミリオネル ブーケ	チェリーピンク(サ ンベルマカザビ)	全谷種芝	Milken Bells	Cherry Pink (Sanbell)	T Kanaya	2005	2008	2008-2009 ジャパンフワワーセレクション入賞
カリブアコア	ミリオネル ブーケ	シフォンブルー (サンベルマシフォ ブ)	全谷種芝	Milken Bells	Consort Chiffon Blue (Sunbell-fubu)	T Kanaya	2005	2008	
花千姫 こもり咲き			四角種芝、東 村重幸、宮谷 健二、鈴木賢 一、田中雄司	Taman	Peaches and Ore me (Sumiregouchi)	Y.Yama, N.Takamura, T.Kanaya, K.Suzuki, T.Miyao	2002	2008	
ハーベス		もも(サンマリニ オ)							

竹下 大学	出品名	たけした だいがく キリンアグリバイオ株式会社		第1回AASブリーダーズカップ(2004年)受賞		1965年、東京都新宿区生まれ。	
		シリーズ名	品種名	育成者	日本での名称	既来での名称	受賞年
ベチユニア	ウエーブ	バーブル(キリマシ)	竹下大学	Wave	Series Name	Cultivar Name	Breeder
ベチユニア	ウエーブ	ミスティーライラック	竹下大学、 渡辺さおり	Wave	Wave	Purple	D.Takeshita
ベチユニア	ウエーブ	ローズ	竹下大学、 渡辺さおり	Wave	Wave	Rose	D.Takeshita S.Watanabe
ベチユニア	ウエーブ	ラベンダー(キリマシ) ジョーキック	竹下大学、 渡辺さおり	Wave	Wave	Lavender	D.Takeshita M.Sanada
ベチユニア	ウエーブ	ブルー(キリマシ) ブルー	竹下大学、 渡辺さおり	Wave	Wave	Blue	D.Takeshita S.Watanabe
ベチユニア	花鼓か	シルバー	竹下大学、 渡辺さおり	Total Wave	Silver	Silver	D.Takeshita S.Watanabe
ニチニチソウ	ファーストキッス	ブルーベリー(FK) ブルーベリー	竹下大学、 渡辺さおり	First Kiss	Blueberry	Blueberry	D.Takeshita S.Watanabe
ベチユニア	ウエーブ	ピンク	竹下大学、 渡辺さおり	Wave	Pink	Pink	D.Takeshita S.Watanabe
プリムラ	プリムレット	ゴールデンシェード	竹下大学	Prinlet	Golden Shades	Golden Shades	D.Takeshita
プリムラ	プリムレット	ラベンダーシェード	竹下大学	Prinlet	Lavender	Lavender	D.Takeshita
プリムラ	プリムレット	レモンシェード	竹下大学	Prinlet	Lemon Shades	Lemon Shades	D.Takeshita
プリムラ	プリムレット	ピンクシェード	竹下大学	Prinlet	Pink Shades	Pink Shades	D.Takeshita
プリムラ	プリムレット	パープル	竹下大学	Prinlet	Purple	Purple	D.Takeshita
プリムラ	プリムレット	ローズ	竹下大学	Prinlet	Rose	Rose	D.Takeshita
プリムラ	プリムレット	ローズレース	竹下大学	Prinlet	Rose Lace	Rose Lace	D.Takeshita
プリムラ	プリムレット	スカールレットレッド シェード	竹下大学	Prinlet	Scarlet Red Shades	Scarlet Red Shades	D.Takeshita
プリムラ	プリムレット	サンライズ	竹下大学	Prinlet	Sunrise	Sunrise	D.Takeshita
プリムラ	プリムレット	ホワイト	竹下大学	Prinlet	White	White	D.Takeshita
プリムラ	プリムレット	イエロー	竹下大学	Prinlet	Yellow	Yellow	D.Takeshita
ダイアンサス	ガーデンカーネ	いちごラテ(キリマシ) イチゴラテ	竹下大学	Garden Spice	Pink Bicolor	Pink Bicolor	D.Takeshita
ネメシア	インプレシア	克蘭ベリー(キリマシ) 克蘭ベリー	竹下大学	Angelant	Melon	Melon	D.Takeshita
ネメシア	インプレシア	アンティグーゼ(キリマシ) アンティグーゼ	竹下大学	Angelant	Peach	Peach	D.Takeshita
ネメシア	インプレシア	アブリコット(キリマシ) アブリコット	竹下大学	Angelant	Fruit Punch	Fruit Punch	D.Takeshita
ネメシア	インプレシア	オレンジ(キリマシ) オレンジ	竹下大学	Angelant	Orange	Orange	D.Takeshita
ネメシア	インプレシア	イエロー(キリマシ) イエロー	竹下大学	Angelant	Pear	Pear	D.Takeshita
ネメシア	インプレシア	ホワイト	竹下大学	Angelant	Almond	Almond	D.Takeshita
ネメシア	インプレシア	ラズベリー	竹下大学	Angelant	Raspberry	Raspberry	D.Takeshita

ジャパンフラワーセレクション(花壇苗部門・グッドバ
フォー・マンズ賞)
ジャパンフラワーセレクション(花壇苗部門・グッドバ
フォー・マンズ賞)

KIRIN agribio

キリンアグリバイオグループは、
植物分野の高品質、高付加価値商品を提供し、
世界の人々の心豊かな暮らしに貢献します。

キリンアグリバイオ株式会社

〒104-0042

東京都中央区入船1丁目5番11号弘報ビル5F

TEL. 03-3523-6885 Fax. 03-5541-5879

<http://www.kirin-agribio.co.jp>



インプレシア 'ホワイト'

かわいい小花のニチニチソウ

「フェアリースター」。

2010年は新色2色が

仲間に加わり全5品種に。

カラーバリエーションが増え、

夏の庭を華やかに演出します。

極小輪ニチニチソウ

フェアリースター®

第一園芸 <http://www.blurette.jp/>

本社・卸ディビジョン

〒140-0012 東京都品川区勝島1-5-21 東神ビル
TEL 03-6404-1320 FAX 03-6404-1321



快適花生活

2010年新品種

Photo. 「ソフトピンク」を使った寄せ植え。

第一園芸育成品種

家庭園芸の知識・技能の普及に39年



イワタバコ

Conandron ramondiioides
本州以南の山地の湿った岩壁に生える宿根草。滝近くに多くみられるところから古名をタキナ、タキジシャと呼ばれていました。



日本園芸協会

■通信教育事業

盆栽技能講座／住まいの庭園技能講座
実利園芸技能講座／総合菊づくり技能講座
植物繁殖技能講座／植物画講座
草木染講座／ハーブコーディネーター養成講座
淡彩花のスケッチ講座／洋らん講座
山野草講座／山菜・きのこ講座

■カルチャースクール(教室)

■出版事業

■友の会(全国に25支部)

■海外研修旅行

指導委員長 桜井 廉

S47園卒 齊田安利

〒151-0061 東京都渋谷区元代々木町14-3 ☎03-3465-5171

プロトリーフは消費者に、環境に、そして生産者に やさしい栽培ストーリーを提案します！！

■水溶性肥料

サングロー
日本初上陸!SUNGRO社製テクニグロー

- 抜群の溶解性
- 各成分のキレート化
- 新成分イオウ分配合
- 充実のラインナップ

商品情報

- ・ 20-20-20
- ・ 20-10-20
- ・ 16-17-17
- ・ 17-5-24
- ・ 13-2-13 各25ポンド
- ・ 10-30-20 (10kg)入

■菌根菌資材

土壌改善を持続し、健康で病気に強い作物づくり



- 内外生菌根菌18種配合
- 土壌有用菌6種配合
- 植物・微生物の生理活性物質
- 水溶性無機成分
- 減肥栽培で環境保全

商品情報

- ・ ミコリーザスタート (3-3-3) 5kg, 22.7kg
- ・ バイオフード 454g, 12.27kg
- ・ ミコリーザダッシュ(草花用) 454g, 12.27kg
- ・ ミコリーザダッシュ(樹木用) 454g, 12.27kg



PROTOLEAF
Gardening Standard

株式会社プロトリーフ 【本社】

〒108-0073 東京都港区三田1-2-18TDDビル4F

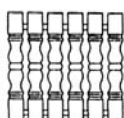
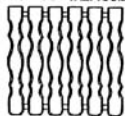
TEL 03-3769-2828 FAX 03-3769-2829

農園芸セクション：岡川 公治 (H16生卒)

ハイジの国から、直輸入!日曜大工で出来る、木製バルコニーフェンスキット!

ALPEN BALCONY

ナールタイプ
長さ79cm×幅11.5cm×厚さ1.9cm
柱頭部を思わせる曲線で装飾された部材は、やさしい雰囲気を演出します。



横板A 長さ400cm×幅11cm×厚さ1.6cm

横板B 長さ400cm×幅14cm×厚さ1.9cm

横板C 長さ400cm×幅18cm×厚さ2.4cm

アルプスタイプ
長さ79cm×幅11.5cm×厚さ4.4cm
独特なデザインに装飾された厚い部材は、豪華な存在感を演出します。

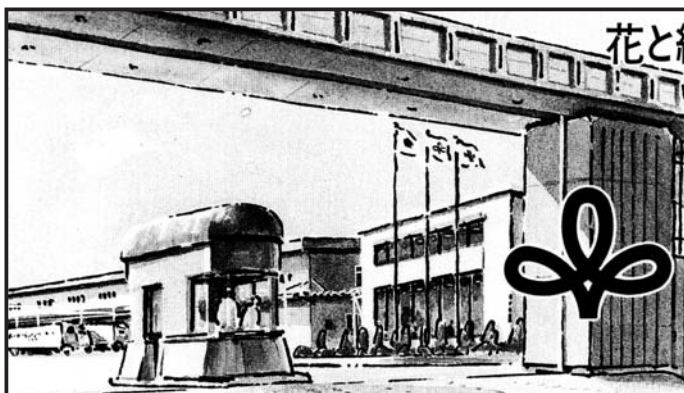
家を花で装う為の新提案!

既存のアルミや鉄のフェンスを

ナチュラルなウディフェンスに!

アルペンバルコニー社

東京都杉並区大宮1-19-3 Tel.& Fax.03-3311-3905



花と緑のある暮らしのお手伝い

● 地方卸売市場

九州日観植物株式会社

代表取締役社長 西川 勲

〒818-0013 福岡県筑紫野市大字岡田310-1

PHONE (092)926-1238(代表) FAX (092)926-5984

— 花産業のコーディネーター —

花鉢・花壇苗の生産、卸、小売、花造園、企画開発、不動産
押花、フラワーデザインスクール、ブライダル



Vivoショップ

Vivo本店

TEL: 045-833-2827

FAX: 045-833-5697

花造園課 TEL: 045-832-3752 FAX: 045-833-2410

不動産部 TEL: 045-832-3076 FAX: 045-835-3438

<http://www.e-87.co.jp> E-mail: info@e-87.co.jp

株式会社 **グリーン武内**

(本社) 横浜市洋光台1-13-19

TEL: 045-833-2827 (代)

FAX: 045-833-5697

有限会社 **グリーンラブ**

(本社) 横浜市洋光台1-16-7

TEL: 045-833-9137

(花工場) TEL: 045-844-7541

輸入花木と園芸資材はしばみちで

みどりと花の郊外ガーデンセンター

外国樹種の直輸入と生産販売!!

しばみち本店

〒334-0825

埼玉県川口市大字赤山948

☎ (0482) 96-3506 (代)

しばみち本店園芸部

川口市大字赤山221

☎ (0482) 96-0566

道順

鳩ヶ谷よりバス
5分、バス停ク
ルワ下車1分、
赤山山王神社そば



姫 柿 (Princess Persimon)
[老鴉柿・Diospyros rhombifolia Hemsl.]



株式会社 樹 芸 [JUGEI]

〒277-0033 千葉県柏市増尾 2-11-19
Tel.04-7173-0908 Fax.04-7173-9085
(ホームページ) <http://www.himegaki.jp>

2000年10月発行
3,400円(税送料込み)
お問い合わせは樹芸へ



カキツバタ育種・生産

からころも
きつつなれにし
つましあれば
はるばるきぬる
たびおしぞおもふ



〒460-0005

名古屋市中区東桜2-18-13

TEL 052-931-8701
FAX 052-931-8727

カタログは、下記のHPをご覧ください。
<http://www2.starcat.ne.jp/hanaya3/>

高品質時代の施肥管理

元 肥 (速効+緩効性...長期持続肥料)

マグアンプⅡ

20kg Lサイズ・Mサイズ・MSサイズ・Sサイズ

N 6 P 40 K 6 Mg 15

使用法はマグアンプKに準じます。

地球に笑顔を



液 肥 (水溶性肥料)

ピーターズ

10kg 各種微量要素入
高純度粉末液肥

豊富な品揃えで、生育ステージ、栽培条件、栽培環境に合わせてお選びいただけます。

NEW 13 2 13 15 2 20



ナメクトール・カタツムリ(マイマイ)駆除剤

ナメクトール

1kg 農林水産省登録第22001号
殺菌第二殺虫剤

雨・湿気に強い製剤で、湿った場所でも高い効果を発揮!有効成分は天然にも存在する成分のため、イヌ、ネコ、家畜等が近づく場所でも処理できます。



株式会社 **ハイポネックス ジャパン** <http://www.hyponex.co.jp>

大阪 〒532-0003 大阪市淀川区宮原4-1-9 ☎06-6396-0801 東京 〒156-0052 東京都世田谷区経堂2-6-6 ☎03-3428-7000



観葉植物と花木鉢物 卸売

株式会社 **川崎植物卸売センター**
有限会社 **はら園芸**

〒213-0014 川崎市宮前区菅生ヶ丘1番1号
Tel 044-976-3445
Fax 044-977-9951

祝：園芸学部創立100周年記念事業報告

鈴木 邦彦

1909年、松戸戸定が丘に千葉県立園芸専門学校が創立されて今年でちょうど100周年を迎えました。

戸定会と園芸学部で100周年記念事業会を結成し、とくに戸定会のOBの諸先輩方を中心に園芸展示合同委員会を作り、準備をすすめてきました。

記念事業を推進するために記念事業募金委員会を発足して、目標額2億円をベースに基本事業、補助事業に配分して、各種事業の当該委員会で検討を進めてきました。

基本事業の柱として、記念館の建築を計画しておりましたが、昨年末降ってわいたような園芸学部の西千葉への移転問題が発生しました。本件については、園芸学部のある松戸市の市民からも反対署名運動等もあり、結果今年6月、正式に教授会で中止が決まり、改めて記念館建設に取り組む事となりました。

そこで、今回の記念式典とは切り離して推進する事となり、募金事業活動も当初平成22年3月末までを1年延長して平成23年3月末までとし、更なる募金協力をお願いしております。

基本事業関連として、

- 1) 記念式典・祝賀会
- 2) 園芸学部100周年記念誌の発行
- 3) 園芸展示会

◇第1会場：「園芸学部の歩みと未来」

園芸学部A棟1階製図室

園芸学部キャンパス庭園など

◇第2会場：「江戸時代の園芸文化史

～岩佐亮二コレクションを中心に～」

松戸市戸定歴史館

- 4) 100周年記念に併せて松戸市民及び学部教員有志による「与謝野晶子の歌碑建立」

◇建立場所：園芸学部A棟 ヒマラヤ杉付近

が進められました。その内容を以下、ご報告させていただきます。

園芸展示オープンセレモニー

100周年記念事業のスタートとして、園芸展示会が、平成21年10月16日(金)～11月15日(日)、キャンパスの隣にある松戸市戸定歴史館で開催。10月16日(金)、松戸市長、市議会議員、学部長、戸定会会長の臨席のもと、テープ



園芸展示会場テープカット（10月16日）



会場をご覧になる天皇・皇后両陛下（10月16日）

カットが行われました。

なお当日、開催前に天皇・皇后両陛下の行幸啓賜りました(写真提供：100周年記念事業会)。戦時中の昭和18年、皇太子時代に学部内に行啓され、芝生の庭園が「サツマイモ畑」であった時代の記憶を懐かしく語られたそうです。

本学部には、大正天皇、昭和天皇、今上天皇が3代にわたって、皇太子時代に行啓されておりますが、天皇・皇后両陛下がおそろいでおいでになったのは初めてのことです。

園芸展示会の内容については、後半にご報告させていただきます。

園芸学部創立100周年記念式典・祝賀会

10月29日(木)：午前11時～12時、松戸市民会館にて招待者、OB、大学関係者約750名の方々が参加されました。

開会に先立ち、去る10月22日に園芸学部4年生の荻野友花里さんが殺害、放火された事件を受けて、会場参加



記念式典会場風景（10月29日）



「園芸学部100年の歩み」ビデオより

が贈呈、内容が紹介されました。

基本事業内容として、①100周年記念館の新築(平成23年完成予定)、②100周年記念広場及びフランス式庭園等各種庭園の改修、③100周年記念誌の発行と補助事業として学術振興事業く園芸産業に関わる企業との共同研究醸成を目的とした学部中堅・若手教員の研究助成>が報告、説明されました。

その後、「園芸学部100年の歩み」をまとめた内容がビデオ上映されました。

学部キャンパス内の庭園風景、実習風景、園場風景や当時最新式のガラス温室などが画面に紹介され、会場から思わず「懐かしい」との声が聞こえてきました。

祝賀会は、場所を園芸学部体育館に移し、午後1時より、荻野友花里さんの事件のこともあり、祝賀会の催しを変更して懇親会に切り替えてスタート。

会場では、多くの諸先輩方、大学関係者方々の懐かしい顔ぶれにいくつもの輪ができて大いに盛り上がりを見せておりました。

花葉会会員も多くの方が参加されていましたが、遠くからはハワイ・マウイ島から武田和男さん、岩手県から吉池



祝賀会会場

者全員で、冥福と早い解決を願い、黙祷を捧げました。

挨拶として、千葉大学斎藤康学長、100周年記念事業会伊東正会長、祝辞を松戸市川井敏久市長、文部科学省の徳永保局長よりお祝いの言葉をいただきました。

また、伊東100周年記念事業会会長より菊地園芸学部学部長に事業会目録

貞蔵さん、山口県から小田善一郎さんなど、懐かしい顔をみせ、時間が経つのを忘れての2時間でした。

与謝野晶子歌碑建立

松戸市民を中心に昨年、「与謝野晶子の歌碑を建てる1,000人の会」が設立され、与謝野晶子が松戸の丘で詠まれた短歌60首のなかから市民による人気投票で2首が選ばれたものです。歌碑は、旧A棟の木造講堂の礎石を利用して、地元デザイン作家の協力で赤御影に刻まれました。

戸定が丘歴史公園と大学キャンパスを結んで散歩する「松戸市緑の回廊」の新しいシンボルとして、学内キャンパスのA棟脇にあるヒマラヤ杉の下に据付けられ100周年記念に花を添えるものとなりました。

～丘の上雲母の色の江戸川の

見ゆるあたりの一むらの罌粟～

～うすものの女の友の待ちえたる

松戸の丘のひなげしの花～



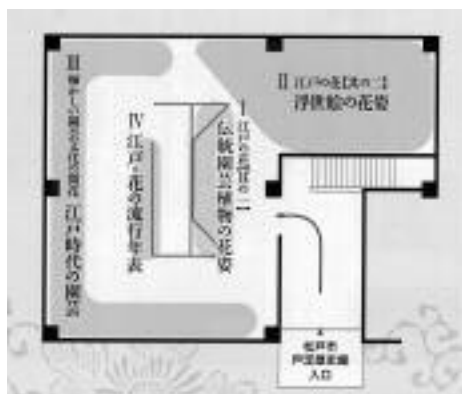
与謝野晶子歌碑除幕式（11月1日）

園芸学部創立100周年記念展示会 テーマ展示「江戸時代の園芸文化史」 ～岩佐亮二コレクションを中心に～

テーマ展示は、故岩佐亮二名誉教授が研究されていた浮世絵、関連文献・資料が、千葉大学附属図書館および千葉県立中央図書館に収められておりましたので、これらの文献・資料を中心にして、展示会内容が組み立てられました。

テーマ展示監修には、横井政人千葉大学名誉教授が当たられ、園芸展示第2小委員会を発足し、野口博正委員長を中心に、小笠原亮氏、鳥居恒夫氏、花葉会幹事の田中桃三氏らの協力で、全体構想、具体的内容に尽力いただきました。

展示は、松戸市戸定歴史館で、10月16日(金)～11月15日(日)に開館されました。



会場展示案内図

展示内容(リーフレットより抜粋)

【Ⅰ】江戸の花[其の1] 伝統園芸植物の花姿

日本の園芸は江戸時代に世界に類を見ないほどの輝かしい発展を見せました。最大の特徴は、「変わり花」や「斑入り・変わり葉」と呼ばれる奇妙ともいえる花や葉をもつ特異な品種を園芸植物としてつくり出したことです。

として、万年青や松葉蘭などを写真パネルで紹介。

【Ⅱ】江戸の花[其のⅡ] 浮世絵の花姿

岩佐亮二千葉大学名誉教授は、江戸時代の園芸史の研究をライフワークとされました。絵の中に描かれた植物に注目して収集された浮世絵には、当時の園芸文化が鮮やかな色彩で詩情豊かに表現されています。

と、貴重なコレクションを中心に江戸の園芸文化史を紹介。



江戸時代の園芸展示風景

【Ⅲ】輝かしい園芸文化の開花 江戸時代の園芸

わが国では花を觀賞し歌を詠むという文化が定着しました。それは、「万葉集」に植物を読んだ歌が多く見られるように、身分に関係なく様々な階層まで広がっていきました。平安時代以降、中国園芸を模範とし、日本独自の

創造分野が開かれ、改良品種の出現と共に花卉園芸文化の発展が始まり、江戸時代には世界の花卉園芸文化の中で最も輝かしい一時期を迎えることとなりました。

1. はやり花の発生

「寛永の椿」が流行の最初と言われています。江戸時代初期には、大名から庶民まで幅広い層に椿愛好熱が広がりました。日用品から調度品類まで様々な物に椿が描かれた「百椿集」で、愛好熱の高さを紹介。

2. 園芸の広がり

園芸を愛した初代将軍家康。椿を愛した二代将軍秀忠。盆栽を愛した三代将軍家光。最高権力者である初代三代の将軍が「草木」を愛した事から江戸時代の世界に類を見ない園芸の発展が始まったことを紹介。

3. 大名と園芸

花好きの将軍の意向を受け各藩は奇種の入手に奔走し、独自の品種改良を行いました。園芸繁栄の下地となった武家の花づくりや、大規模な都市改造によって一大庭園都市となった江戸園芸発展の背景を紹介。

4. 園芸隆盛の原動力・植木屋と本草書

上流階級から生まれた園芸趣味は、江戸に集められた上方の庭師と江戸、そして領国の庭師や植木屋の繁盛、園芸書の出版により庶民にまで広がりました。園芸隆盛の原動力となった植木屋や園芸書の様相を紹介。

5. 八代将軍吉宗の開放政策と園芸

庶民に花の見所を開放し、空前の花ブームを起こした八代将軍吉宗。本草書を奨励して殖産振興を図り、西洋博物学の解禁で自然科学としての博物学を隆盛させたようすを紹介。

6. 太平の世の庶民文化の開花と自然愛好の潮流

江戸中期の世情の安定と経済の発展で、財力を蓄えた庶民。庭を造るものが現れるなど、都市には、自然を求める機運が起こりました。庶民が花木を楽しむ姿をはじめ庭園の様子や季節のイベントなど、庶民に広がった庶民に広がった自然愛好を紹介。

7. 公園設計と博物学の先駆者松平定信

寛政の改革を行った松平定信は、政治・経済の分野のみならず、思想・文学・芸術・園芸などにおいても多大な業績を残しました。名造園家として、博物学の先駆者としての定信の業績を紹介。

8. 花菖蒲の品種改良に打ち込んだ生涯松平定朝

旗本・松平定朝は、花菖蒲一筋に品種改良を重ね、晩年までに会心の百余種を作出しました。定朝が、生涯を通して記した「花鏡」と厳選した秀花を図写した「花菖蒲培養録草稿」を紹介。

9. 身を超えたつながりを生んだ園芸

江戸文化の大きな特徴に、庶民化(民主化)があります。「赦鞭会」という博物家の集まりが結成され、園芸の世界で階級を超えた趣味のつながりが現れました。このようなつながりによって様々な本草書や博物図譜などが出版されたことを紹介。



工芸品ともいえる植木鉢

介できるものはテーブルに並べて見学者に改めて研究功績を判りやすく紹介していました。

また、中央のコーナーでは、「なつかしい学部庭園」の紹介にあわせて、「天皇・皇后陛下の園芸学部に行幸啓」を紹介されたパネルには、多くの注目を集めておりました。



パネル展示「植物細胞工学」

10. 園芸への探求心がもたらした大流行・大騒動

まだ見たことのない「珍種」「変わり葉」「変わり花」を追い求める探求心は品種改良の技術を高め、遺伝の特性をも見出しました。菊、朝顔、桜草を始めとし、園芸全般を時代色豊かに展開させた江戸文化的背景を紹介。

11. 園芸技術の発達

秀花新花・珍草奇木への関心の高まりの裏側では、それらを増殖するために様々な工夫がこらされました。

園芸品種ごとに専門化していった園芸書と園芸技術の進歩へとつながった立花を紹介。

12. 幻の将軍・徳川昭武と戸定邸と園芸

15代将軍徳川慶喜の実弟徳川昭武が暮らした戸定邸と園芸学部の関わりや、昭武が趣味とし撮影した写真から、戸定邸で親しまれた園芸の様子を紹介。



パネル展示「なつかしい学部の庭園」

園芸学部創立100周年記念展示会

総括展示「園芸学部の歩みと未来」



パネル展示「花卉園芸学 花卉研究の歩みと今」

園芸学部A棟の1階製図室を会場に、園芸学部の各研究室の先生方を中心に、国立大学ではわが国唯一の園芸学部100年の歩みの特徴ある教育と研究内容をパネルで紹介していました。

近代農業、園芸の発展に活躍した諸先輩方の実績をわかりやすく解説。現物で紹介



現在のフランス式庭園

時代を切り拓く熱き挑戦者たち ～花作りの後継者にロマンとパワーとアイデアを～

久保田 芳久

100年に一度の大不況。花産業も苦しんでいます。この、状況下でも生長して行く次世代。この次世代への提言こそ今大事です。今回のサマーセミナーでは、後継者として頑張っている人々と、世代が代わったからこそこの工夫、また新規就農の目から見たこの業界の捉え方、自己の分析のしかた、大学の識者たちによるあるべき姿の提言を頂きました。

会場は昨年と同じ、(財)全電通労働会館 全電通ホールで、御茶ノ水駅に近く、JR、地下鉄の便利な地です。開催日は、7月18日(土)～19日(日)の二日間でした。

◎7月18日(土) 一日目

オープニングは、千葉大学大学院園芸学研究科教授 安藤敏夫花葉会会長から行ってもらいました。今回のセミナーの講演者は数多く、それだけ様々なケースと問題があり、柔軟な解決策が採られています。

今回の意義を説明されたあと、このセミナーのオープニング司会を担当している山下容子幹事が、先日の東京都議選で当選されたことの報告と紹介が行われました。この花産業・花文化に生きてきた者として、それを訴えての当選は、様々な意味をもちます。環境の大切さと、花業界の結びつきを条例というレベルで実現する手段を持ったのです。

「観葉植物生産から新天地を求めて」

株式会社プラネット 代表取締役 大林修一氏



施設園芸農家として4代目に当る大林氏は、改革に継ぐ改革を行ってきた人です。まず実家での観葉植物のメリクロン増殖

から取り組んでいきました。スパテフィラムの増殖と販売ではかなりの成果を出し、リレー栽培グループを結成しました。

その後、ハイドロカルチャーに取り組みますが、需要が少なく、生産規模拡大でつまずき、父親から勘当、解雇を言い渡されました。この苦境が今日の大林氏を生み、育てていったようです。その頃、それまでの取り組み、メリクロン+リレー栽培+植物工場の実績が豊橋商工会議所から表彰され、その副賞金で独立起業しました。沖縄大十園、(株)プラネット設立、(有)プラネットファーム設立、環境ISO取得、NPO法人エコグリーン協会設立、(株)グリーンネット設立、循環型生産緑化システムを構築。マンション対応の野菜生産ハイドロカルチャーシステムがグッドデザイン賞を受賞。組織作りと発明と工夫を続けて来て、さらにそれを続けていくでしょう。一生かけて。

「目指すのは安行の構造改革」

株式会社小林ナーセリー 代表取締役 小林隆行氏

日本の伝統的園芸産地、安行の植木屋三代目、小林隆行氏には、安行の今までとこれからを話して頂きました。



植木の里安行の始まりは、380年前吉田権之丞を祖とし、江戸の振袖火事(1657年)に大きな需要が発生。産地化して行きました。戦後、県の植物見本園が開園され、高度経済成長で植木の需要は爆発的に拡大しました。そして低成長期になりましたが、フロリアード出展に始まる、海外輸出の道が開けました。安行の職人たちが自身が植え込みを行いました。

今、海外での植木ブームは盛んで、「もみじ」など英語の書物も多く、ヨーロッパ、アメリカ、中国のみならず、旧ソ連圏にも取引が始まっています。芝道さん、小林さんらの功績であり、「日本で売れないなら、海外の景気のいいところに植木を輸出すればいい」の柔軟な発想です。

小林氏のフロリアード関連の画像は多く、日本の文化を海外に広めるエネルギーが感じられました。

「大規模経営を継ぐ私のチャレンジ」

有限会社皿井植物園 代表取締役社長 皿井善清氏



愛知県の渥美半島の南端、黒潮の太平洋と三河湾に囲まれ、冬が温暖で夏が内陸より涼しいこの地、田原市には園芸農家が

発達し、皿井植物園はこの地で大規模観葉植物生産を行っています。経営面積11.5ha、年間販売額14.5億円、従業員数100名。荷を運ぶための車が次々とプラットホームに着き、海外の視察をしているようだとされています。

一代目が技術、生産システムを組み立てて、継いだ二代目です。父親である会長に生産ラインを任せつつ、皿井氏は販売に力点を置いています。メイン商品「幸福の木」の鉢やサイズを高級に、また一方リーズナブルにし、消費目的と景気の動向に合わせた企画を組み立てました。単一な仕様では、用途が限定されてしまうからです。受注生産とし、当たっています。「一年に一品を開発する」とし、品質の安定と販売力、これは経営上どちらも欠けてはなりません。二代目としての持ち味ある話でした。

「生産者育種で私は地元マーケットを開拓する」

有限会社 はなぞの野呂高原 代表取締役 今井 満氏

ファレノプシスの切花をしていた父親から引継ぎ、今井氏は鉢物として生産・販売を行っています。海抜100mの広農場と、海抜780mの野呂山農場(平均気温10℃)を使い、フラス



コ出し→鉢上げの広と、花芽分化処理→開花→寄植え→出荷の野呂とに使い分けて体系付けた生産を行っています。地元広島県と関西地方の市場出荷が主ですが、地元はオリジナル品種と有名品種を組み合わせ、関西市場はオリジナル品種で出荷を構成しています。

育種目標の大きな要素に、実生でもメリクロンのようにそろそろ系統を出すことが掲げられています。幾つか満足のいく色は得られていますが、まだ次のものを開発中で、これからが楽しみです。また広島市内にアンテナショップを持ち、価格の適正値、売れ筋、新品種試験販売などを行い、消費の研究も重ねています。

「花作り後継者が目指すべき後継者像」

岩手大学農学部 特任教授 木村伸男氏



専門が農業経営学の木村教授は、「現代農業のマネジメント」「新時代の農業経営のリーダー像」など著書が多数です。千葉県

県暖地試験場当時を含め、長年の研究から、花の後継者を辛口に切って行きました。

農業は生業でありこれを事業(ビジネス)へ、として見たとき、就業者は経営者となります。生業は「生活(家計)のために生活と一体化して生産すること」。事業は「社会が必要とする物・サービスを生産すること」と定義します。変化→問題発生→解決→必要性→仕事・事業化→新事業の誕生を行うのです。これが話の流れとなります。

「青年農業者アンケート」「農業法人アンケート」などから繰り出される実態の点数は低く、100点満点として、花卉作経営者の経営者能力レベルは、28.5点です。花卉作後継者の環境適応観が32点で、また経営観が35点。「極めて低い」との解説がつきます。その実態を挙げた上で、この日会場の方々にお願いしたアンケートから事例を拾い、注意を喚起し、当日の演者の内容に理想を多々見出していきます。特に大林氏の「解雇、勘当」はすばらしい機会であったと。見事な、皆が納得の行く、解剖の一時間でした。

◎7月19日(日) 二日目

「花産業に生きた私の経験」

有限会社さあやファーム 施設園芸部門 リーダー 西村行緒氏



関西出身の西村氏は、二代目ではなく、新規就農です。外の世界から入ってきた園芸業界を語っていただくためです。「告白録」

と言ったイメージの出だしでした。大学卒業後就職した製薬メーカーでセールスの仕事に就きました。日々が厳しい上司からの追求でした。売れない原因、克服方法の問い詰めで泣くまで行われました。医師に新たに売ることの難しさはその上司も分かっていたのですが、その分析を本人に行わせました。やがて人間恐怖症に陥り、退職し、実家のタイル施工業を手伝い、淡々と過ごす日々を経験しました。

結婚し、この仕事の問題点も見えてくると(セールス時代の上司から分析を叩き込まれたため)、「もう一度、力を試してみたい」という思いに駆られ、奥出雲町で就農します。花苗作りを担当し、最初は最低の品質との評価でした。その反省に、あの製薬会社での追求を自らに行ったのです。「仕事上に必要な能力」技術も経営も人間関係もすべて含まれます。これが生き、5年経過し、市場で一番が取れました。涙が溢れたそうです。自分が取り戻せたのです。あの厳しい上司の訓練(?)が生きたのです。

その追求の項目が細かく示されました。テキストに詳しく記載されています。

その分析は前日の木村先生の話の実例と言っているものでした。

西村氏の苗物の品質は一目見て分かる、高品質なものです。あのつらい経験が生きています。

「若い世代の挑戦・・・私の使命」

有限会社宮川洋蘭 専務取締役 宮川将人氏

熊本県宇城市の戸馳島(とばせじま)は、洋蘭に魅せられた農家たちが23軒もあり、五蘭塾を結成して25年。その二代目として宮川氏に話をさせていただきました。大学卒

業後、国内研修を数件重ね、アメリカのアンディ松井氏の門をたたき2年間学びました。ここに企業経営の芽が備わりました。



栽培種は多品目とし、周年生産できるようにします。コスト改善、MPS参加に次ぎ、遠隔地だからこそその産地直送に力を入れました。島の産物みかん、葡萄、梨の農家と組み、洋蘭も郵便局と年間大口契約を結び、重量制限運賃を適用。出荷個数による割引など有利な条件が整いました。市場より紹介で生花店直送をしています。ご自宅直送は昨年12,700人に新鮮な蘭を届けました。販売ルートは、生産直売、花市場、店舗直送、法人ギフト、ネット販売、イベント、頒布会と多岐に整えているところです。

デザイン力、量販店パワー、通販会社、法人ギフト、インターネット販売と挑戦は続きます。これからも暑い挑戦をしていく洋蘭ルーキーズの戸馳島です。

「消費者の気持ちをキャッチして、私はこんな商品を作ります」

千葉県香取市東庄町 東庄園 菅谷健治氏



海匝、山武地区は、観葉鉢物生産が多く、また農家のまとまりがよく、市場へのアピールの強い産地です。今は二代目が7割を超

え、20～30代が主力の産地です。

菅谷氏はポット観葉を中心に生産し、経営に携わって10年目です。両親の経営は芳しくなく、これを改善してゆきます。ゴールドクレストセル苗、3寸ポット苗が当たり、品目を拡大していきました。またトビアリート音記号仕立など創意工夫されたものが追加されていきました。今は「かわいい」も含めた商品が多岐にわたり、都内のOLの意見も取り入れています。

これらの活動の動力に「千葉花と緑の生産者紹介」に参加したことが挙げられます。農家と市場、売店が一同に会し、情報、意見の交換をします。「消費者の気持ち」を捕まえ「こんな商品を作る」のです。これからも東庄園

ブランドを育てていく菅谷氏です。

「仲間とともに新たなブランド産地を」

花職人AIZU 代表 岩淵 薫氏

会津地方のトルコギキョウ栽培は、JA中心でまとまり、販売もJA任せでした。よって販路への訴求も不十分でした。栽培も相手が見えないと気が緩み、これではいけないと思う若者たちが集まりました。

既成のJAの枠を超えた範囲で集まり、共通のロゴとマークを持ち、共同で市場、展示、販促のプロモーションを行っています。売の人たちとの距離は縮まり、FAJさんも研修に来ますし、青山フラワーマーケットの店長さんたちも見学に来ます。太い信頼関係が出来ています。

MPSの取得は、切花では一番早く、信頼の証であり、農薬使用量の減少につながっています。

技術勉強会もよく行い、産地交流も頻度が高いようです。そして来てくれる人々に時間は割かれますが、常に感謝の気持ちで接しています。今、トルコギキョウで一番ホットな産地になりました。

「花作りの後継者に提言：こんな時代を生きよう！」

香川大学農学部 教授 深井誠一氏



締めくくりは、深井先生です。この時代の定義から、花をなぜ買うか、花のある暮らしは文化的か、歳をとると花を買うようになる、環境がトレンドなのではない、遺伝子組み換えの虚実、人は花の何を見ているのか、かわいいとは、季節感、なぜ多様性が要るのか、花を贈ると幸せになる、未来へ、との項目を一気に話しました。すべて本質に迫りかつ、意外な結びに展開します。「このキティちゃん。これがなぜかわいいのか自分には分かりません。こんな無表情な子がいたら、気味が悪い。でも一番かわいいものなのです。かわいいと定義すればかわいいのです」。「菅谷さんの四

なる、環境がトレンドなのではない、遺伝子組み換えの虚実、人は花の何を見ているのか、かわいいとは、季節感、なぜ多様性が要るのか、花を贈ると幸せになる、未来へ、との項目を一気に話しました。すべて本質に迫りかつ、意外な結びに展開します。「このキティちゃん。これがなぜかわいいのか自分には分かりません。こんな無表情な子がいたら、気味が悪い。でも一番かわいいものなのです。かわいいと定義すればかわいいのです」。「菅谷さんの四

葉のクローバーがなぜかわいいか自分には分からないと言った。OLはかわいいと言った。だからかわいいのです」。会場が沸きます。爽やかにかつ、遠慮ない表現は、見事です。二日間の講演も引き出しながら、見事に締めくくって行きました。

結びのダーウインの言葉「力の強いものが生き延びるとは限らない、変化するものが生き延びるのだ」……。これが今回のセミナーの総括として響き渡りました。

参加者のアンケートにも多くの持ち帰るものがあったことが伺えます。

「刺激・パワーをもらえた。モチベーションが上がった。園芸業界の方向性が見えた。何をすればよいか解った」などです。

◎テキスト購入ご希望の方は、代金2000円(送料込)を添えて、下記へお申し込みください。

〒271-8510 松戸市松戸648

千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室内「花葉会」事務局

TEL:047-308-8810 郵貯銀行振替：東京5-1334花葉会

◎第27回2010年花葉サマーセミナーは会場が変わります。

日時 平成22年6月26日(土)・27日(日)

会場 千葉大学けやき会館(JR西千葉下車)



各種苗会社出展の花コーナー



準備が整った会場風景

花漬けの日々

千葉大学大学院園芸学研究科 花卉園芸学研究室 博士前期課程2年

小 川 優 理 子

私は昨年、他大学を卒業し、この千葉大学大学院の花卉研へと進学してきました。現在の花卉研での植物に囲まれた生活は新鮮で刺激を受ける毎日です。その一部をご紹介します。

実学主義～栽培してみて学ぶこと～

千葉大の花卉研に入って最初に学ぶのは『栽培』。4月から通い始め、5月の中旬には研究室で管理している温室1棟の管理を任されました。まずは毎日の灌水です。以前の大学でも、当番で灌水を行っていたので灌水なんて簡単だろうと思っていましたが、とんでもない。植物の求めるように灌水をするというのは非常に難しいのです。農学部で4年間を終えてきたというプライドを捨て灌水について学び直します。ただ毎日水をあげればいいというわけではなく、その日の天候や植物の状態にあった灌水をしなければいけません。絶妙なタイミング・量が求められ、『水やり3年』とよく言われるように灌水は奥が深いのです。しかし3年たったら私の場合留年になってしまうので修士の2年間でなんとかマスターしたいと思っています。

さらに栽培は灌水だけではなく、施肥や薬散もしなければなりません。もちろんそのときの植物の症状にあった肥料や薬を与える必要があります。動くことも話すこともできない植物にとっては管理者だけが頼りであり、そんな植物のちょっとしたサインを管理者は見逃してはいけないうのだと学びました。以前は『灌水なんて日替わりの当番制で良いのでは?』と思っていましたが、今では管理している植物の状態を毎日自分の目で確認しないと心配になります。当たり前のことばかりですが、多くの植物を実際に栽培することで気付かされることが多く、現在も日々、勉強と発見の連続です。

体力勝負～男女関係なくパワフルな学生達～

花卉研では週2回温室内と圃場で作業をしています。温室内では研究室で管理している株のピンチや鉢上げなどの手入れや温室修理などを行います。先日は温室の天井部のビニールの張替えを行いました。普通は温室に登るなんて危ないからと業者に頼むのだと思いますが、『これも研究の一環だ』と教え込まれた学生達は作業を一日でやり終えるのです。

圃場での作業は草刈や穴掘り、木を切ったりと体力のいる仕事ばかりです。草刈も刈払い機などを使いこなし、汗や草、泥まみれになって作業を行っています。もちろん鎌の使い方も上達するので『鎌の使い方上手くなったので鎌で草刈したいです』なんて学生もいて頼もしいです。現在の花卉研は以前に比べ女子学生が多いのですが、男子学生に負けず劣らずこのような力仕事をなんなくこなしています。

日々の学生生活～研究はもちろん私生活も、花～

現在の花卉研ではペチュニアやサクラに加えフロックスやオステオスペルマムといった花卉研の研究としては扱ったことのない植物の研究をしている学生がいます。このように学生が異なる植物に触れ情報交換することでより新しい発見があったり、自分の実験に生かすことができたりするのです。前例のない研究・栽培に日々悩まされている学生ですが、今後の花卉研学生のための基礎作りのためにもと研究に熱心に取り組んでいます。

また、花卉研恒例の1000属検定にも賢明に取り組んでいます。植物の名前を覚え始めたら目につく植物が何なのか気になるようになります。以前は何気なく通っていた道も植物を意識するだけで景色が変わるのです。物事に対する意識や姿勢次第で学ぶことはたくさんあるのだと学びました。

このように花卉研の学生は学内だけでなく私生活でも植物に目がいってしまう花・植物にどっぷり漬かった日々を送っています。



園芸学部100年、節目の年に

千葉大学 園芸学部別科花卉専攻2年

日 野 綾 子



フィールドセンターにて
播種をする別科花組

今年は、千葉大学園芸学部創立100周年です。その1年を追ってみました。

2009年2月 2年生専攻特別研修報告発表会

一人ひとりが、この1年の研究を論文にまとめ、発表します。いつのまに、こんな

研究をされていたのでしょうか。そういえば、実習後一人残って計測していた先輩、夏休みも毎日ハウスに来ていた先輩、研究の鉢花を戸定祭の販売に出された先輩がいました。私たち1年生3人は会場係をしながら驚きでいっぱい。私たちにもできるのだろうか……。身の引き締まる思い。先輩たちがひととき大きく見えた1日でした。

2009年2月 卒業を祝う歓送会

プレゼントや寄せ書きを用意。先輩方から次の組長・副組長の指名を受けます。生協食堂での一次会、場所を移した2次会へ宴は盛上がり、たくさんの思い出や先生方・仲間への感謝の言葉が続きます。それぞれの道へ、先輩たちは旅立ちます。1年間、ありがとうございました。

2009年 春休み

学部花卉研の皆さんがローテーションに入ってください……残った3人で毎日の灌水当番は大変過ぎる……感謝です。OGの方が、ハウス管理にも加り、みるみるきれいになっていく1号・2号・1000属ハウス。なんとか春休みを乗り切りました。専攻特別研修テーマも決まり、計画書も提出。「なんでもいい、必ずノートにメモを取るように、それが後できっと役に立つ」。研究生の方からのアドバイスを胸に、もたもたと、でも楽しく研究を進めます。

2009年4月 新入生来る

6人の新入生を迎え、総勢11人となった別科花組。歓迎会での初々しい挨拶がまぶしい。早いものだな。2年生の授業は別科のものはほとんどなくなり、学部生に混じって講義を受けます。単位取得に向けてがんばらないと。

2009年5月 母の日の出荷

実習では「鉢花の出荷」も行ないます。一番忙しいのが「母の

日」。挿し芽、鉢上げ、ピンチ、矮化剤処理と、一連の実習を経てこの日を迎えます。お客様が箱を開けたときの笑顔を想像しながら、丁寧に最後の調整を行ないます。まさか、大学でダンボールの組立てするなんて思わなかった……。

2009年6月 戸定祭準備開始

大学祭・戸定祭で、別科花組は花卉やわた飴の販売、1000属ハウスの公開などを行ないます。今年は、少人数で販売に集中！ 6月中に販売するパンジーやビオラなどの品種を決め、種子を注文。11月から春まで開花する、いろいろな品種を選定します。

2009年7月 前期テスト中の実習、パンジー播種

販売品種の種子を自分達で播きます。自動播種ラインを持つ千葉大ですが、今回は勉強の為にセルトレーへ手播きです。温度・湿度の管理された発芽室で一斉に発芽したらハウスへ。

2009年9月 夏休み、パンジーのポット上げ

本葉3～4枚に育った苗を、3号ポットに仮植える実習。手植えのほか、土作りから全自動の移植ラインも稼働します。今年は3800ポットを用意。戸定祭が楽しみです。



パンジーのポット上げに
精を出すメンバー

2009年10月29日 100周年記念式典

2009年10月31日～11月2日 戸定祭

私たちが植えた、ペチュニア‘さくらさくら’の樽が、松戸キャンパスを盛大に飾る予定です。

偶然にも、伝統ある千葉大学園芸学部の創立100周年の記念の年に居合わせた私たち。この「花葉」が発行される12月には、



自動化移植ラインで
補植をするメンバー

春の花苗や鉢花の生産実習、卒業研究のまとめに忙しいことでしょう。来年は千葉国体にも、花苗を提供します。わずか2年間ですが、ここ別科花組で学ぶこと、経験することは盛りだくさんです。

故小杉 清先生の思い出



私と先生のお付き合いは昭和38(1963)年5月、先生が香川大学農学部から園芸学部(花卉園芸学研究室)に教授として赴任されてから始まります。当時、研究室には浅山英一助教授、文部教官の私と農場に渡辺重吉郎技官がいました。

当時の園芸学部の最大の課題は、将来4年制の学部だけでなく、修士、博士課程を持つ大学院大学になることでした。それには、すべての教官が学位をもつことが必要でした。このときの園芸学部には学位所有教官がわずかに5名だけで条件不足でした。この理由で先生が香川から赴任されたという事実があります。先生は赴任後直ちに、私はもちろん他の教室の教官にも熱心に学位の必要性を説かれ、このことは私にとって最初に最も印象的なことになりました。この先生のご努力により10年程で園芸学部が大学院大学の資格を得ることができました。

私自身、東大植物生態学研究室に内地留学をして生態学を勉強していましたが、研究結果がわかりにくく、しかも時間がかかりすぎると先生からご指導をいただき、やはり重要な観賞植物の花や葉の色彩に研究テーマを替えて京都大の学位を取得し、現在まで斑入りやカラーリーフなどを含めた色彩の問題をテーマにしております。

先生ご自身の、いわれる重要な園芸のお仕事としては、現在もあるアルミ温室の建設でした。当時の園芸学部温室は鉄骨で年々の錆び防止など、整備がたいへんでした。ちょうどこのころ錆びないアルミ温室の普及がアメリカの園芸雑誌に紹介されました。この記事を先生がご覧になって、今後これが日本でも絶対必要であるといわれました。いち早く学部 zu 作ろうと建設費の入手にご努力され、4年間で4棟240坪のアルミ温室ができました。これが国産アルミ生産温室の最初になりました。建設にはアルミ初仕事の業者はもちろん、村井千里さんや渡辺重吉郎さんのたいへんご苦労がありました。

先生の研究は、香川大学時代からグラジオラスの花芽分化を中心として、多くの花卉の花芽分化を双眼顕微鏡下での剥皮法によりご停年まで続けられました。しか

し先生の停年間際に走査型電子顕微鏡による立体的な花芽分化の研究が欧米で始まりました。日本ではこの新顕微鏡は超高額で入手できず、また時間的にも間に合わず、先生の研究がまとめられなかったことは私達にとっても最も残念なことだったと思います。

先生はお話が好きで、極端ないい方をしますと長くて終わりがありません。また、同じ話題を同じことばで最後まで繰り返される特技(?)をお持ちでした。このように日本語の話術はユニークで堪能でしたが、外国語はまったくお嫌いで、すべて人任せでありました。

先生の話は、先生が教師になる前の7年間、太平洋戦争で花栽培ができなくなるまで、父親(小杉喜四郎氏、温室800坪)とユリ、枝物、バラなどの切花生産を世田谷でされたため、花生産技術や花産業のことがほとんどでした。したがって、趣味的な花づくり、趣味の会、植物コレクションなどは好きでないと常々いっておられました。先生の教師としての誇りと自信は、大型営利経営を経験した大学の教授は他大学にいないということから生まれ、実用の必要性を常に我われに説かれておりました。当時経験のない私にとって貴重なお話がたくさんありました。

またご自分の家は武家ではないが旧家であることから、町会のお仕事を積極的にされていたため、そちらのお話もたくさんお聞きしました。停年にいられてからは小杉家の歴史の調査をずっとやられたそうです。

今年10月9日に次男忠夫氏宅(先生のお宅と同じ敷地内、歴史的な先生宅は奥様が入院のため空き家)を安藤敏夫先生とお線香をあげに参りました。齢80にも近い私には樹齢100年(?)の太い柿の木がお庭にまだ生きているのを見て感激し、さらに、昔のその他いろいろを思い出しました。

88歳の米寿のお祝いの際はお元気で、100歳までご丈夫かと思われましたが、残念なことに肺炎にかかり97歳でお亡くなりになりました。ご子息によれば認知症はなかったようですが、足腰が急速に弱り、老衰といえるご最後とのことでした。

まだまだ思い出はたくさんありますが、最後に先生のご冥福をお祈りして筆をおきます。

(横井政人)

秋山泰男君を偲んで



花葉会総会懇親会会場にて
(平成20年10月)

あまりに突然の、あまりに早すぎる訃報であった。さようならもいわずに別れてしまったが、あれから一ヶ月たった今でも、彼がひょっこり現れて、「いよっ」と肩をたたかれるような思いがしてならない。今こうして書

いているときも、大切な

友を失った何ともいいがたい寂寥感と喪失感で打

ちひしがれる思いがする。

彼は、昭和53年4月、園芸学部に入學してから30年以上のお付き合いであった。彼はタバコをくわえながら、いつも私たちの輪の中心にいた。コンパでは、ビールの大瓶をぐるぐる回しながらラッパ飲みをして、6秒足らずで飲み干す豪快な芸を披露し、学生のみならず教授陣からも喝采を浴びた光景が昨日のように思い出される。豪快さと繊細さの両面をもつ彼は、歌舞伎の勧進帳の弁慶のような立ち振る舞いであった。その後、共にした数々の無礼講も今では青春時代の大切な宝物である。

花卉研究室で共に学び、卒業後彼は種苗会社に就職し育種の道に進んだ。私は小売業であったが、卒業後も年に1、2回会う機会があると、仕事の話のみならず、プライベートな話にも花を咲かせ、夜も更けるのを忘れて飲み明かした。彼の意見と異なったことをいうと、「おまえ、わかっちゃいない」とよくいわれた。文字で書

くと乱暴な言葉に聞こえるが、この言葉を言っているときの彼の目はいつも優しくかった。

彼はプロ野球の横浜ベイスターズの大ファンであった。自室に飾ってあったと思われる優勝した年のパレードの写真がお葬式の式場に展示してあった。彼は2軍の試合にもよく出かけ、これから活躍しそうな若手選手を探し出すのも好きだった。花を育てるときの目で観ていたのかもしれない。

育種の仕事では彼は大きな業績を残した。近年では数々の賞を受賞したビオラ‘シャングリラ’のシリーズやパンジー‘ルネッサンス’、カリブラコア‘イルミネーション’、カレンデュラ‘ファッション’、ダイアンサス‘ラブソディ’、ダイアンサス‘セルシオール’など、私の知っているのはほんの一部であろう。AAS入賞のビオラ‘シャングリラ パープル&ブルーマジック’は彼の別れの場の祭壇を飾った。育種は、結果が出るのに長い時間を要すると聞く。これから彼の手がけた品種が、どんどんと世に出てきたのかもしれない。我々の先輩でもあり、彼の勤めたトキタ種苗の時田会長は、「彼は天才的育種センスを有する」と述べられている。企業の損失のみならず、花の業界にとっても大きな損失になったであろう。

浄土真宗の導師によって彼は旅立った。阿弥陀経の中に「青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光」と浄土に咲く蓮の花のありさまを語った言葉がある。さまざまな蓮の花が咲くお浄土で、彼は何をしているのだろうか。早速、花の育種に取り掛かっているような気がする。彼の地で、彼はどんな花を作り出すのだろうか。謹んでご冥福をお祈りします。合掌

(昭和57年園芸学科卒 小笠原誓)

花葉会総会

10月10日(日)午後2時より、平成20年度花葉会総会が東京・芝パークホテルにて開催されました。出席者42名、宮田増美幹事の司会進行で定刻通り開始。

開会に先立って、千葉大学名誉教授・花葉会顧問の小杉清先生(平成21年7月21日、享年96歳)、および花葉会幹事の秋山泰男氏(平成21年9月23日、享年52歳)のご逝去について、横井政人名誉会長、安藤敏夫会長より説明があり、哀悼の意を表して黙祷が行われました。

安藤敏夫会長より開会の挨拶と大学の近況報告がありました。「松戸キャンパスの西千葉への移転問題はなくなりました。移転に伴う収支バランスが大幅に赤字になるという状況が明らかになったことが最大の理由ですが、松戸市民、柏市民の移転反対運動の勢力が大きかったことも勝利の一因です。園芸学部創立100周年記念事業も順調に準備が行われています。皆様の参加をお待ちして

おります」。

さらに、花葉会幹事の山下ようこ氏(56園卒)が7月の都議会議員選挙で民主党より当選したことを紹介。「環境・建設委員会に所属。屋上・壁面緑化、オフィスグリーン条例などに取り組み、花産業発展のために尽くしたいと思いますので、よろしくお願いします」とあいさつがありました。

午前中に開催された幹事会で推薦を受けた長岡求幹事長が議長に指名され、議事に入りました。

平成20年度事業報告

① 7月12・13日

第25回花葉サマーセミナー

② 10月5日 総会

③ 花葉会賞の贈呈

20年度の受賞者は丹後英彦氏(昭34卒)、村川文彦氏(昭35年卒)、木崎信男氏(昭36年卒)の3名であった。

④ 10月14日～21日第18回海外園芸事情調査「タスマニアとメルボルン

の旅」

⑤ 12月10日「花葉」27号発行

⑥ 花産業必修1000属検定

⑦ 幹事会の開催は、平成20年5月17日、6月21日、7月13日、8月9日、10月5日、12月3日、平成21年1月24日、2月14日、3月1日の9回。

平成20年度会計報告

収入の部

前年度繰越金	338,476
会報広告料(27号)	1,071,870
サマーセミナーテキスト売上	38,880
卸用カタログ売上	16,000
協力金	785,670
セミナー収入	0
基金より繰入	1,925,640
基金より繰入	
(次年度セミナー会場費)	582,750
基金より繰入	
(セミナー補填分)	757,521
雑収入	38,546
預金利息	711
合 計	5,556,064円



総会会場

支出の部	
印刷費	103,425
会報関係	1,321,590
通信費	97,140
運送費	4,810
記念品代	132,300
会議費	278,870
事務費	251,352
賃金	493,720
慶弔費	16,915
税金	70,000
セミナーへの補填	757,521
柏の葉キャンパス桜苗木代	115,600
次年度分セミナー会場費	582,750
雑費	100,000
合計	4,325,993円
差引残高	1,230,071円

第25回

2008年サマーセミナー会計報告

平成20年7月12・13日(財)全電通労働会館 全電通ホールにて開催。参加者数237名(うち幹事、講師、記者、発表者、学生等関係者計90名)。

収 入

受講料	
@30,000 × 112名	3,360,000
その他割引 35名	914,970
合計	147名 4,274,970円

支 出

会場費	2,680,320
印刷費	766,000

講師謝礼	700,000
講師旅費宿泊費	257,950
通信費	22,060
運送費	216,930
事務費	317,692
会議費	4,873
税金	66,666
合 計	5,032,491円
差 引	-757,521円

平成20年度会計監査報告

監事の河野寛司氏より、「平成20年度の会計収支の監査の結果、事務処理および諸帳簿の記載は正確かつ適正に行われていたことを報告します」と、報告があった。

平成21年度事業計画案

- ①第26回2009年
花葉サマーセミナー開催
平成21年7月18・19日(土・日)
(財)全電通労働会館 全電通ホール 懇親会会場 ホテル東京ガーデンパレス
- ②花葉会賞の贈呈
- ③第20回海外園芸事情調査平成21年11月25日～30日「台湾中・南部の視察」
- ④「花葉」28号 発行
- ⑤花産業必修1000属検定
- ⑥基金管理委員会の設置および管理運営の基本方針について検討
基金はセミナーの赤字によりここ数年、取り崩しが始まっている。セミナーのコスト削減を図り、赤字体

質を改善したい。今後は基金管理委員会を作り、管理・運営の基本方針を作ることしたいと、説明があった。

平成21年度予算案

収入の部

前年度繰越	1,230,071
会報広告料	1,200,00
セミナーテキスト売上	50,000
その他の収入	400,000
基金より繰入	162,929
預金利息	2,000
合計	3,045,000円

支出の部

印刷費	110,000
会報関係	1,400,000
通信費	100,000
運送費	5,000
記念品代	150,000
会議費	300,000
事務費	260,000
賃金	500,000
慶弔費	50,000
税金	70,000
雑費	100,000
合計	3,045,000円

基金報告

前年度残高	26,824,413
きよ金	92,225
定期利息	71,165
普通利息	1,088
前年度会場費戻入	601,650



都議会議員としてあいさつする
山下ようこ幹事



議長を務める長岡求幹事長



会計監査報告をする河野幹司監事

セミナー補填 △757,521
 次年度セミナー会場費 △582,750
 一般会計へ繰入れ △1,925,640
 合計 24,324,630円
 (平成21年3月31日現在)

役員改選

本年は2年ごとの改選の年に当たる。ご逝去された小杉清顧問、秋山泰男幹事2名を除く全員を再選とする。

会計年度の変更について

現在は、4月始まり3月決算で、総会の時点ですでに半年経過している。これを改め、会計年度を9月始まり8月決算とし、来年度以降に変更する。

その他

・会員の入会について

花葉会会則第三条第二項に基づき、総会にて承認することになっている。真家隆史氏 日本大学生物資源科学部農学科卒(花葉会会員真家幸雄氏御子息)

なお、以上の議題は、拍手をもって承認されました。

報告

第27回2010年花葉サマーセミナーは、平成22年6月26・27(土・日)、

千葉大学けやき会館で開催予定との報告がありました。

花葉会賞贈呈

総会に引き続いて、花葉会賞の贈呈がありました。花葉会賞受賞者選考委員会委員長熱田健幹事より、篠田朗彦氏(昭和37年造園学科卒)、西川勲氏(昭和38年農業別科修了)、今西弘子氏(昭和38年総合農学科卒)の3名を紹介。安藤会長より賞状と記念品が授与されました。

受賞者を代表して篠田朗彦氏より、挨拶がありました。

花産業必修1000属検定試験

A級、B級合格者認定証授与

検定について安藤会長より説明があり、今年度の合格者5名を紹介。代表して井上将希氏に安藤会長よ

り、合格認定証が授与されました。

B級 谷口彰登氏、井上将希氏、寺田絵美氏、落合忍氏、毛井智子氏

受賞記念講演

今西弘子氏より、「今なぜ花育なのか」と題して、講演が行われました。

懇親会

午後4時より、武内嘉一郎幹事の司会進行で、懇親会が始まりました。

花葉会賞受賞者の西川勲氏による挨拶のあと、乾杯の発声を渡辺重吉郎氏が行いました。

途中、田中桃三氏、岩佐昌子氏、石川君子氏等の近況報告。終始和やかな雰囲気で行進。村井千里幹事による一本締めで閉会となりました。

(文責:編集部)



懇親会風景

植物の環境循環
 ・コンポナーメントシステム
 ・コンテナ植栽
 ・パレットシステム

植栽デザイン・メンテナンス作業のビル内循環

ハイドロ循環型緑化システム

株式会社 プラネット

代表取締役 大林 修一

本社・生産物流センター
 〒441-8132 愛知県豊橋市南大清水町字元町61-2 TEL 0532-25-8677

東京営業所・埼玉(三郷)営業所・名古屋営業所・大阪営業所

関連会社
 (株)グリーンネット 東京営業所
 〒116-0002 東京都荒川区荒川1-35-4 三河屋ビル5F TEL 03-5615-4332
 (有)プラネットファーム
 〒901-0204 沖縄県豊見城市金良149番地 TEL 098-856-8883

www.g-planet.com

花葉会会則（2009/10/10）

〈名 称〉

第一条 この会は「花葉会」という。

〈事務局〉

第二条 この会の事務局を千葉大学園芸学部園芸学科花卉園芸学研究室室内におく。

〈会 員〉

第三条 本会の会員は、千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室並びに附属農場花卉部に在席した者、及び戸定会会員で現在花卉関連業務に携わる者、

(2) 内地留学生、研究生、聴講生、その他本会の主旨に賛同し、総会の承認を得て所定の手続きを終えた者とする。

〈目 的〉

第四条 この会は会員相互の親睦、研さんと情報交換を図ると共に、花卉園芸界の発展に寄与することを目的とする。

〈事 業〉

第五条 この会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

①総会 ②親睦会 ③研究会 ④会報、名簿等の発行 ⑤功労者の表彰 ⑥その他、前条の目的を達成するために必要な事業。

〈役員等〉

第六条 この会に次の役員をおく。

①会長1名 ②副会長 若干名
③幹事長1名 ④副幹事長 3名 ⑤年次代表幹事 若干名 ⑥幹事50名以内 ⑦会計監査2名

(2) この会に名誉会長をおくことができる。

(3) この会に顧問、相談役を若干名おくことができる。

〈役員等の選出と役員〉

第七条 会長は総会の総意により推戴し、会務を総括し、会を代表する。

(2) 副会長は総会の総意により推戴し、会長を補佐し、会務を処理する。

(3) 幹事長は幹事の互選により選任し、幹事会を主催し、会を代表し

て会務を処理する。

(4) 副幹事長は幹事の互選により選任し、幹事長を補佐し、会務を処理する。

(5) 年次代表幹事は幹事の互選により選任し、世代の意見を集約し、会の運営に寄与する。

(6) 幹事は会員の中から互選する。

(7) 幹事は幹事会を組織し、議事を審議決定し、会の事業を執行する。

(8) 会計監査は会員の推薦により会長が選任する。

(9) 会計監査は会の会計を監査する。

(10) 名誉会長は会員の中から総会において推戴する。

(11) 顧問、相談役は会員の中から幹事会の協議を経て会長が委嘱する。

〈役員の任期〉

第八条 役員の任期は2年とし、再選を妨げない。

〈会 計〉

第九条 この会の経費は会費、寄付金、収益金をもってあてる。

(2) 本会の収支予算及び決算は幹事会の議決と会長の承認により定められ、決算は会計監査の監査を受けなければならない。

(3) 会計年度は毎年9月1日より翌年8月31日までとする。

(4) 会費は必要に応じ幹事会の議決と会長の承認により徴収する。

〈会 議〉

第十条 総会は年1回とし、会長が召集する。

(2) 幹事会は必要に応じ、会長が召集し、会務事項について審議する。

(3) 総会の議事は出席会員の2/3以上の賛成がなければ議決できない。

〈会則の変更〉

第十一条 この会則は総会の議決を得なければ変更できない。

〈その他〉

この会の細則については、幹事会にはかり、会長が決定する。

〈附 則〉

この会則は昭和56年9月6日から実

施する。

この会則は平成9年10月26日から実施する。

この会則は平成10年10月17日から実施する。

この会則は平成13年9月29日から実施する。

この会則は、平成15年9月27日より施行する。

この会則は、平成16年10月1日より施行する。

この会則は、平成21年10月10日より施行する。

花葉会 役員（2009/10/10）

顧 問：

相談役： 岩井英明、魚躬詔一、
小田善一郎、鶴島久男

会計監査：河野幹司、村川文彦

名誉会長：横井政人

会 長：安藤敏夫

副会長：國分 尚、渡辺 均

幹事長：長岡 求

副幹事長：田中桃三、望田明利、
武内嘉一郎

年次代表幹事：田中桃三、
望田明利、武内嘉一郎、
小笠原誓、渡辺 均
(年次順)

企画編集幹事：石川君子、
小泉 力、鈴木 司、
田旗裕也、松原紀嘉、
宮田増美、村井千里、
山口まり、山田幸子

庶務会計幹事：上田善弘、
小沢 勇、西原彩子、
野本寿久、福永哲也

事業基金募集幹事：熱田 健、
猪熊雅雄、大林修一、
小笠原誓、小黑 晃、
久保田芳久、齋藤俊一、
莊 智裕、鈴木邦彦、
富山昌克、山下容子

(五十音順)

❑ 花葉会賞受賞者紹介

北九州エリアの唯一の鉢物専門市場の発展に貢献する

九州日観植物株式会社 社長 西川 勲 氏

経歴

昭和19年3月 福岡県生まれ
昭和36年3月 福岡県立福岡農業高等学校卒業
昭和38年3月 千葉大学園芸学部農業別科修了
昭和39年4月 日本観葉植物株式会社入社。造園部に勤務



勲氏の生家(実父勇氏)は、野菜苗、花苗などの生産を行う園芸業で、本人は、将来九州に戻って造園業を起こすことを志望していたが、上司である斎藤洋氏(昭和9年千葉高等園芸学校卒、当時東京支配人、常務取締役)から、将来の発展性を見越して

九州地区での鉢物専門市場の開設を強く勧められた。氏はこれを受けて帰郷、家族会議の招集などを経て、市場開設の同意を得た。

昭和40年10月 筑紫野市岡田の地に九州日観植物取引場開設準備室を開設。

昭和43年6月14日 九州日観植物取引場初市。勲氏時に24歳であった。独創性に富む氏は様々な企画を展開して業績の拡大に努めた。年次に従い列举すると、次のようになる。

昭和43年 鉢物の「九州産地化」を目指して、愛知、静岡、岐阜方面の優良農家に依頼して、農業従事者を鉢物生産者に育成すべく研修生として送り込んだ。かくして地域農業の振興を計った。

昭和46年以降、市場業務に率先してコンピューターを導入し、常時システムの向上を目指した。

また、鉢物、苗物の流通容器(フラコン、トレー、ダンボール)の規格化の推進を、全国の生産地、同業花き市場へ向けて呼びかけ続けた。

昭和57年 花き卸売市場における市場買い上げ代金決済の仕組みは、従来から



市場鳥瞰写真

不統一、緩慢な傾向に置かれていたが、買出人に向けて積極的にアプローチして「代金一週間システム」を構築し、徹底をはかった。

平成9年 農林水産省の「卸売市場高度化補助事業」に参画し、市場内にローラー指導搬送システム(ローラー延長35キロメートル)を施設し、商品の入荷・出庫の省力化に努めたが、このシステムは全国的に類例が無く、高い評価を得ている。

平成15年 すでに施設したローラーシステムに、新たに電光掲示板による機械競りシステムを導入し、両システムをコラボレートして市場の入荷・出荷業務の無人化を確立し、現在に至っている。

平成21年 新たな課題として、COMPLEX CENTER(複合施設)構想の実現に着手した。

(文責:谷口勇<元(株)フラワーオークションジャパン代表取締役社長>)



ローラーシステム

❑ 花葉会賞受賞者紹介

人と時代に恵まれた半生

篠 田 朗 彦

経歴

昭和14年 神奈川県茅ヶ崎に生れる
昭和33年 県立湘南高校卒業 千葉大学入学（造園学科）
昭和37年 千葉大学卒業 神奈川県立大船植物園勤務
その後 県庁農業技術課 園芸試験場相模原分場長 三浦試験場長等を歴任
平成12年 大船植物園長を最後に県を定年退職
平成12年～20年 全農神奈川県本部技術顧問
平成13年～現在 日本ガーデンデザイン専門学校講師
平成18年～現在 英国王立園芸協会日本支部理事

著書・論文 庭木の作り方(池田書店 共S45)、最新園芸大辞典(誠文堂新光社 共S46)、アーバンガーデニング(講談社 共H14)、神奈川県の現存・潜在自然植生(県 共S47・56)、ヨーロッパに於ける広域緑化の技術手法(S50 県) 等

その他 神奈川県職員海外派遣研修(西ドイツ 2ヶ月間 テーマ・都市緑地の保存と再生48) 日本植物園協会業績賞(H8)



誰に強いられるでもなくそれなりに過して来た過去に、今回花葉会からお褒めをいただけるという。あらためて今までを振り返る。何か人様に良いことをしたんだろうかと、相変わらず最後まで借りのある人生ではなかろうか。この道を目標にするよう

になって半世紀弱、一言で云えば人と時代に恵まれた半生だったと思う。

人

百姓の小せがれとして幼年期を過した頃は、遊びは自然の中にあった。大学受験する頃、急激な都市化にみまわれ、田畑を失う代わりに大学への進学切符を手に入れた。全国区の受験校であった出身高校に変わった先生がいた。その先生の授業を受けると大学受験は生物では絶対駄目だと云われていた。梨の菊池教授に憧れて鳥取農専に行かれた地元の大地主の息子であ

った。その先生に相談すると松戸は生白くてだめだいわれた。農つまり食糧生産がこの道の原点であると説かれた。私はその泥臭さより少しのナウさを期待して松戸を選んだ。地に着いた学問をしよとの、先生の教えであったと思う。

大学では、一般教養で我が国生態学の先駆者沼田眞先生(後に植物生態学会会長)がおられた。当時沼田理論は世界に通じると云うことで、少壮の先生の講座は教養・専門に限らず全部潜り込んだ。数字の羅列は理解できなくても、学問をするこの真摯な態度に感銘を受けた。

松戸に来ると植物の野外実習の指導で国立科学博物館の奥山春季先生がおられた。奥山先生にはちょうど手がけておられた日本で最初の原色野外植物図鑑の撮影にお誘いを受けるなど、個人的にも可愛がっていただき、野生植物に対する興味を向けていただいた。

進路を決めるのが、ちょうど大船植物園の建設時と重なり、この道を希望した。大船植物園には大先輩の清水基夫さんが園長としておられ、お前がそんなに希望するなら、待遇は悪くなってもよければ推薦はしてやろうと云うことで、結果的に植物園にもぐりこんだ。

昭和30年代後半は花や緑がようやく生活環境を豊かにする材料として観られるようになってきた。出来たばかりの大船植物園も住民に親しまれ毎年入園者数が増加していった。

ここで“花”や“緑”は人間にとって綺麗さを提供するだけのものなのだろうかと云う疑問が起きてきた。自分の生き様として植物を扱うことの必然性が欲しかった。

ちょうどその頃ドイツから植物社会学が導入され、緑化や自然保護に学問的根拠に基づく提案が積極的にされ、私はそれに飛びついた。その牽引車の役割をしていた横浜国大宮脇昭教授の門を叩き、代休を利用して、週一度聴講生として宮脇先生の授業を聞き、その後研究室で最終電車まで学生や研究生などと過すことが続いた。

植物を景観や美としてでなく、必然性のある生きる仲間としての見方は私にとって新鮮であった。

同じ頃鎌倉在住の植物学者・初山泰一先生にも定期

的に野外に連れていってもらい、野生植物に対する観察眼を養うトレーニングが続いた。

昭和30年半ばからあったのではないと思うが、清水基夫さんなどが中心になって月一度 東京・青山で「花の懇話会」が開かれた。花や植物に関する農家・流通関係者や研究者などが幅広く集まり、情報交換とその道の第一人者の講演を聞く機会があり、よく参加した。黎明期の先達の話はすごい刺激になり、集まった若いメンバーのなかから数多くの著名な専門家が生まれていった。

時 代

大船植物園に入った昭和37年はオリンピックブームでようやく花や樹木が住民の身近なものとして取り上げられ、各地に公園や植物園等の緑地施設が設けられるようになり、また列島改造と云うことで高速道路網などが

整備され、膨大な自然破壊の代償として所謂緑化ブームが起り、新しい緑化素材を求めた時代であった。

大船植物園でも、自治体では珍しく外国の機関と種子の交換を行い新しい観賞植物の素材を導入する事業を行った。

当初大船植物園では園芸植物に限らず植物全般の収集に力を入れていた。植物園として保存数が多いのが一つの尺度になっていた時代である。

役所の財政が厳しくなってくると、組織が自分を売り込まなければいけなくなり、民間の協力関係の中で、組織が運営されるようになった。

園長在籍中はそんな時代の替わり目であった。「園長の花散歩」と称して定期的に入園者を自ら案内したり、フラワーセンターフェスティバルと称してアマチュア団体や地元の方々と共同で祭り事を企画した。

(左ページ上に続く)

□ 花葉会賞受賞者紹介

花と人とのかかわりの視点から花育の理念に提言

今 西 弘 子

経歴

1963年 千葉大学園芸学部卒

1965年 京都大学大学院農学研究科(花卉園芸学専攻)修士課程修了

1977～89年 大阪府立大学総合科学部にて心理学関係の単位取得、花卉園芸学と心理学の学際、境界領域の研究に着手

1991年 「花と人のかかわりに関する調査研究」により京都大学農学博士の学位取得。その後消費者の心理的側面からの「花の消費動向調査」等も手がける

2007年～ 花育理念の作成等にかかわる

帝塚山学院大学非常勤講師、法政大学兼任講師、東京農業大学研究員、大阪テクノ・ホルティ園芸専門学校客員教授等を経て、現在東京テクノ・ホルティ園芸専門学校、日本ガーデンドesign専門学校、JFTD学園日本フラワーカレッジ講師。花と人のかかわりの視点から「花の文化史」、「フラワービジネス」等を講義。

著書「花と人間の新しい関係を求めて」(農文協)、「農業技術体系花卉編」(農文協・共著)、花の名随筆シリーズ「十二月の花」(作品社・共著)他

穂坂八郎先生に卒論指導を受けた最後の学生で、実際に指導していただいたのは当時助手でおられた横井政人先生でした。千葉では開花と温度、京都では開花と日長が卒論・修論のテーマでした。ただ今ふと思ひ出すのは、その間花を実験の対象としか見ることができなくなっていることに不安を感じていたのか、実験や卒論・修論とはまったく関係のない花の文化史関連の書物を買集めたり、読んだりしていたことです。

欲がないというか、やる気がないというか、卒業してしばらく当時新しかったフラワーデザインをかじったりした後、あっさりと専業主婦となりました。下の子が4月には小学校に上がるという、およそ30年余り前の早春、家族旅行の列車の通路に落ちていた新聞の切れ端に目を止めたことが小さな始まりだったのでしょうか。そこには「アメリカでは社会人がふたたび大学に・・・」という記事があり、帰宅後早速近くの大阪府大に聴講の申込みに行っていました。リカレントの走りです。

(左ページ中に続く)

感謝

私はいい時代を過したと思う。

未だ戦争の影を背負った少年時代から、貧しくても前向きに何かを求める対象があった青年期に育ち、その時々に出会った先達に教えと刺激を受け、少しずつ自分の将来を定めていったのである。

大船植物園には神奈川県38年間在職中29年間いた。途中5回転勤があり、行儀見習いや組織改変の手伝いをさせられたが、次の移動では必ず大船植物園に帰ると言う役所では珍しい人事の経験をした。あいつは他では勤まらないと云うことか、当人にとってはありがたいことだった。

県退職後は全農神奈川(旧県経済連)で緑化部門の立ち上げに参画し、県内植木生産者の育成に協力し、専門学校の講師として“緑”の本質を後進に訴え、また、

RHSJでは、機関紙の編集のお手伝いを通して、園芸や“緑”の分野の行く方向を考えている。

今まで述べて来たように自分が師として慕ってきた方々は、なんぼ追っかけても絶対に適わないものを持った方々だった。20歳代では、今はこの先達から沢山の借金をしよう。それは30歳代になって返そう。だから甘えてもいいんだと。

それが30歳代になっても40歳を過ぎても借り続け、そのままになってしまっただけに既にお返しのできなくなった方々もおられる。何時までも借りっ放しの人生である。

自分の居場所はどこなんだろうと考えてみた。あるとすれば植物を生きものそのものとして観て、その視点から人々と過してきたのではなかろうか。自分の考えている事ややってきた事はメジャーな分野ではないが、常にその時代と共にいたように思っている。

とくに目的があるわけでもないの、とりあえず千葉大在学中の怠慢が原因で不足していた理科教職取得に必要な2つの科目を聴講しました。園芸とはまったく違う理科教育法の心理学的内容に興味をおぼえ、その後結果的に12年間家事の傍ら毎年1〜3科目の心理学関連の科目を聴講し、心理学関係の先生方の講義とお話を聴く機会に恵まれました。その中で花は人の心理と深い関係にあることに気付き、心理学の統計的手法をそのまま使ったり、結果の出しやすいかたちに変えたりして花と人との関係を数値化するためのアンケート調査、解析等の試みをはじめました。幸いなことに当時スーパーコンピューターがようやく大学で使えるようになったばかりの頃で、かなり膨大な調査結果を処理することが出来ました。来る日も来る日もアンケート結果のデータ打ち込みを続け、少しずつ有意な結果が得られるようになっていきました。関西心理学会、園芸学会等で発表をする内にこのような境界領域的な調査が珍しかったのか、新聞や雑誌等に紹介されたりするようになりました。

一主婦の単なる思いつきのような調査や研究を認めていただけたのはやはり千葉や京都で教えを受けたことが大きかったのではないかと思います。学位論文のテーマは「花と人のかかわりに関する調査研究」でしたが、しだいに「消費者は花に何を求めているのか」というような調査や講演の依頼が行政や生産者、市場、

小売業者の団体等から入るようになりなりました。一方園芸専門学校や大学では主に花と人のかかわりからみた花の文化史、花の消費の講義をすることが求められ、その準備のために花の文化史の資料に目を通すこと、関連する世界史、日本史、経済等の勉強をやり直すことの必要に迫られましたが、結果的にはそれが以後の調査や研究を深めるのにプラスになったと思います。

この仕事を始めてから20年以上がたち、私なりの「花と人のかかわり」のかたちが見えてきたと感じていた一昨年、思いもかけず花育推進検討委員会の委員長に指名され「花育の理念」を作成することになりました。委員会は農水、文科、花普及センターの方々、フラワーデザイナー、教育関係者、花や資材の取り扱い業者の方々等10人余りで構成されており、様々なご意見を取り入れてかたちを変えた部分もありましたが、期待以上に私の提言が活かされ、これまで積み上げてきたことが少しは役に立ったのかと感じました。

生来人前に出て話をする等ということとはもっとも不得意で自分には向いていないと考えていましたが、このような仕事をするようになったことに不思議さを感じます。人生の後半近くに始めたことでほんのわずかでも社会的貢献らしいことができたこととすれば身に余る喜びです。これもアンケートにお答え下さった何千人ものの方々、大学の先生、先輩や後輩等多くの方々の様々なかたちでのお力添えに依るものと感謝しております。

今なぜ花育なのか ～花育基本理念の周辺からみる～

花育推進検討委員会委員長 今 西 弘 子



花育のイメージについて、花関連の専門学校生のコメントに次のようなものがありました。「学校の花壇に、みんなで同じように花を植えて、同じような生長を観察す

る。準備された花材を使って似通ったアレンジを作り、お母さんのお土産にする。花業界の仕掛けた少し無理のある活動」。

この意見に代表されるように、花育普及の大きな問題点は、花を愛する人、花に関わる人々の賛意、同意を必ずしも得ていないところだと思います。その原因を明らかにするために、基本理念の周辺から、もう一度花育のあり方を考えてみようと思います。そしてその内容に共感していただけるなら、花育の内容にそれを加味した方向を検討していただくか、しなくても、知識として持っていただくだけでもよいと思います。

花育の基本理念（要旨）

おもに日常の生活空間に、ふさわしい花や緑を取り入れ、幼児・児童が花や緑のある快さを身近に感じることのできる環境を整え、幼児・児童1人1人が花や緑のある快適環境の創造に参加しようとする姿勢を育み、健全かつ多様で豊かな心身を育成する教育活動。

なおこの「花育」の推進には、平成2年大阪開催花博のテーマとされた現代人の課題である「自然と人間の共生」と生態系等への配慮としての「自然破壊を回避し、健全な状態に保全すること」がこの理念に含まれるものとする。（花育活動推進委員会）

花育基本理念の前半は、①（幼児・児童が）花や緑のある快さを身近に感じることのできる環境を整える、②（幼児・児童が）花や緑のある快適環境の創造に参加しようとする姿勢を育む、としています。

花育は、①②からスタートします。実習の前に花や緑に親しむ機会をできるだけ多く持つようにします。たとえば、身近な花や緑の様子や変化などを繰り返し観察する、花や緑の世話をする作業、飾る作業などを見学する、花や緑の名前を知る、花の話を聞く等々。花育は、将来花緑に親しむことのできる素地を作るのが主な目的です。

花育基本理念の後半は、①自然と人間の共生、②自然破壊を回避し、健全な状態に保全するとしています。花育の内容すべてが原則的にこの①②に反するものであってはなりません。花育実施・指導者は①②に反することないように、努力・工夫をする必要があります。

命を扱う花育を通して生命の意味や大切さを伝える細心の注意が必要です。芽が出ない、花が咲かない等、うまく扱えなかったときの心のケアも十分に。

花育の必要性

自然を分類すると、人間の手が加わっていない自然を大自然（一次自然）。人間が手を加えた自然を中自然（二次自然）、これは人が利用しながら生態系の多様性を継続、保存しているものです。そして小自然。これは公園や庭、花壇などでしょう。

共生とは、支え合う関係、ふつう片方のみが利益を得る関係は指しません。花育では、少なくとも生態系の破壊を回避する方向の共生を基本とし、使用する植物の検討（環境・生態系への負荷他）が必要です。

古い時代、花と緑（＝植物）と祖先たちは必然的に共生する密な関係でした。現在、花と緑との密な関係はほぼ失われてしまいました。そこで花育の必要性が浮上しているのです。

花育以前の問題として、都市や屋内という「究極の不自然」の中における花や緑と人とのかわりかは歴史的にみても、まだ端緒についたばかりです。データの集積や花育を実践する中から、それぞれの地域（人と自然）にふさわしい花育のあり方を考え、作り上げることが必要です。

花育の目的は、花や緑の持つ機能（花育推進方策に記載）を効果的に活用し、①生活空間の花や緑を眺めた

りふれたりすることによって、心身を癒し、リフレッシュさせます。②知識や体験を盛んに吸収する過程にある幼児・児童が花や緑に親しみ、育てることで、命の営みに触れる。これは情操面の向上、体験活動の効果が期待できます。③花を介した世代間交流、地域活動。これは地域とのつながりを深め、人とのふれあいを身につけます。

現代の日本人が好む花

今の花店の花の約70%は、18～19世紀のヨーロッパの王侯貴族が楽しんだ花に由来するといわれています。貧しい植生の国の人々が外(国)から持ち込んで楽しんだ花を豊かな植生の日本に持ってきているのです。今後の未来を担う子ども達に伝えるものがそれでよいのか。過去の園芸にとりつかれないで、今後を見通した花育を考えて実践していただきたいのです。

花に関するアンケートを繰り返した結果、花を美よりもやすらぎ、自然とイメージする人が多いようです。好まれる花の平均像は、季節感のある、自然の野の雰囲気を持つ、他の花とは違う適度な特徴のある花、軽い感じの、薄い花びらと、折れそうに細くやや長い花首をもつ、白かごく淡い色の、小ぶりの花、やすらぎとやさしさと、やわらかさの感じられる花。すなわち「軽・薄・淡・小」の花、「3Y」の花となります。

反対にあまり好まれない花は、一年中目にする季節感に欠ける花、元々のその花らしさが失われて、どれもがバラやダリアのようにはやかで改良の進みすぎた感じの花、花びらが厚く、重い感じの、花首が短く太い花、濃い、派手な色の大きな花、野の花であっても、ありふれた花、粗野な感じのする花、「重・厚・濃・大」の花となるでしょう。

私たちの自然観、価値観が大きく変化してきています。1970年代に、自然観は人間のための自然環境保護から、人類が生き続けるために、人間が我慢しても生態系の機能を維持するようになりました。価値観も、開発、技術、工業から、自然環境保護へ。量的なものや物の豊かさから、質的なものや心の豊かさへ、金権支配から連帯意識、コミュニティ重視(身近な人々との良好な関係)などに変化しています。

この大きな変化の中で、花の見方も変化して当然です。花育指導者は社会の変化に関心を持つ必要があります。

地域性と多様性

地域(=コミュニティ)は人と自然から成り、ひとつひとつ

それぞれに独自性があります。地域で行われる花育も同様です。

花育は、地域の人と自然を大切にする、好きになることから始めたいと思います。地域を重視する花育活動には、祭事、行事等にかかわる植物や、原植生(またはそれに近い)、自生の花、すなわち「和の花」を積極的に取り入れましょう。社会的に容認されやすい花育のかたちはここにあるかもしれません。

長く土地の暮らしと深く関わってきた地域の原植生、自生の花の大切さ、価値(花育活動推進方針に記載)をわかりやすく子ども達に伝えましょう。

そのためには花育指導者の植生への知識、理解、納得の徹底が不可欠です。花育推進、継続、発展の原動力となる「この地域だけの」「この地域ならではの」ものです。これは地域の活性化、観光資源としての利用につながります。人の側の都合ではなく、季節や植物の側の都合に合わせた花や緑の楽しみ方も伝えます。自然の花・野の花と、生活の中で楽しむ花(生産花卉)を分けてそれぞれの役割や大切さを伝えます。

多様性について、花育では生態系破壊などを回避する姿勢を明確にします。雑多にみえる日本の植生を快いと感じる感性を育みます。たとえば使用材料は単一種利用より混種、混植等の方向へ。多様な動植物が棲み分け合う豊かな生態系とします。

古くから、茶畑周辺のススキなどが育つ「茶草場」は自然の宝庫、多様な植物が育っています。里山、茅場、茶草場は人と自然が支え合う中で多様性を保全してきました。このようなシステムに類似するものを、都市の生活空間に採りいれたいものです。

花育実施上の留意点

誰にも納得のできる、愛される花育に育てていくために、留意点を以下のようにまとめました。

- ① 植える、飾るなどの実習の前後のフォローが重要。
- ② 自然と人間の共生、自然破壊の回避・自然保全をつねに念頭におく。
- ② 現在の花育の内容は未完成である。花育に携わる方には時代に合う望ましいあり方を考え、作り上げようとする姿勢が求められている。
- ④ 花育でもっとも重要なことの一つは花を介した人とのふれあい、地域とのつながりを深めること。
- ⑤ 実施法、実施対象により配慮事項が異なることがある。
- ⑥ 地域性、多様性を考慮する。(文責：編集部)

花葉会基金への募金のお願い

花葉会は、会員相互の親睦、研鑽と情報交換を図ると共に、花卉園芸界の発展に寄与することを目的とし、①総会、②親睦会、③研究会、④会報、名簿等の発行、⑤功労者の表彰等の事業を行っています。

おかげさまで、多くの方々からのご支援・ご協力により、上記の事業をどうにか円滑に運営しております。

さて、会報「花葉」創刊号等でおりました花葉会基金は、28年目を迎え、平成21年3月現在、約2430万円となりました。今後、基金管理委員会を設置し、管理運営の基本方針を作り、健全な経営を図る所存です。しかし、昨今の低金利の状況では、花葉会がさらに発展し、花葉会の目的を推進するための事業を展開し、情報の収集・交換などにより後輩の育成を行うには、この花葉会基金の充実をさらに図ることが必須であります。

是非、花葉会の趣旨に賛同していただき、募金をお願いしたいと存じます。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

なお、ご送金につきましては、通信欄に「花葉会基金」と明記の上、郵便振替：東京5-13341花葉会をご利用ください。
花葉会幹事一同

お問合せ：「花葉会」事務局

〒271-8510 松戸市松戸648 千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室内 TEL:047-308-8810

編集後記

◆千葉大学園芸学部創立100周年おめでとうございます。一連の記念行事を鈴木邦彦幹事が短期間でまとめてくれましたので掲載することができました。お楽しみください。◆28号も多方面にわたって貴重な原稿をお寄せいただきました。ありがとうございます。

ございます。◆今年は冬の訪れが早いようで、南関東の地でも、木々は早々に葉を落とし始めて、なぜか追われる気分です。その上、新型インフルエンザが猛威をふるっております。どうぞお大事に！◆『花葉』は花葉会ホームページ<http://www.kayoukai.net>

から見るができます。また、『花葉』への寄稿は、ホームページを経由して、花葉会事務局宛でどうぞ。お待ちしております。

花 葉 2008 No.27

平成21年12月10日発行

発行人 安藤敏夫

編集人 山田幸子

発行所 花葉会

〒271-8510 松戸市松戸648 千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室内

<http://www.kayoukai.net/>

編集 (有)フローラルプランナーズチーム

レイアウト・印刷 (株)インタラクション



カレン スターピンク

種 苗 部【主要扱い品種】種子(メロン・人参・レタス・ネギ・ピーマン)

TEL: 045-262-7405

FAX: 045-261-7495

花 卉 貿 易 部【主要扱い品種】球根(ユリ・チューリップ・フリージア)、種子(ユーストマ)

TEL: 045-262-7413

FAX: 045-261-7495

園 芸 部【主要扱い品種】カレン(小輪系ベチュニア5品種・春)、神戸ビオラ(14品種・秋)

TEL: 045-262-7400・7401

FAX: 045-231-3968



【総合園芸】
種苗・花卉・園芸資材・造園緑化
横浜植木株式会社

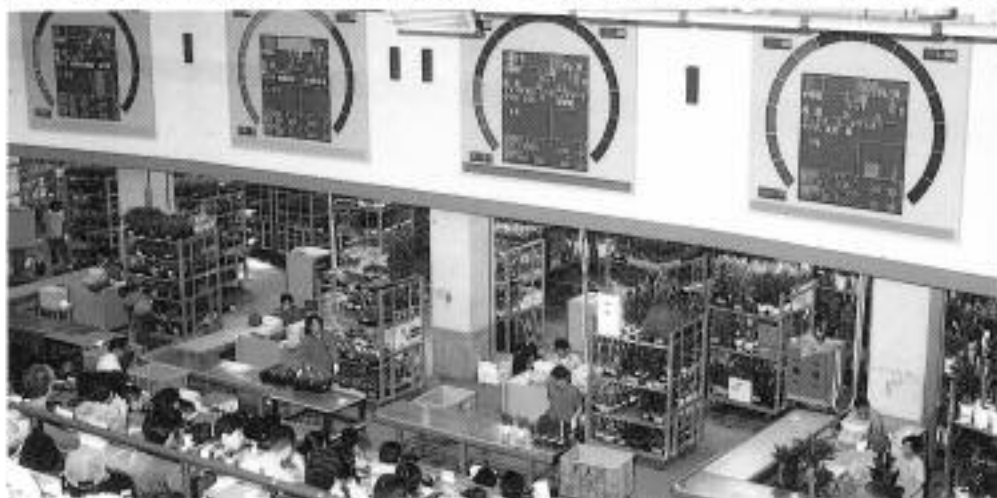
THE YOKOHAMA NURSERY CO., LTD.
〒232-8587 神奈川県横浜市南区唐沢15番地

<http://www.yokohamaueki.co.jp>



神戸ビオラ
パニーシリーズ

F A J は花卉の新しい流通をめざす会社です



FLOWER AUCTION JAPAN

東京都中央卸売市場大田市場花き部

株式会社 フラワー オークション ジャパン

〒143-0001 東京都大田区東海2-2-1

TEL. 03 (3799) 5525 FAX. 03 (3799) 5434

ホームページ <http://www.faj.co.jp/>

信頼と信用を第一に

福永 哲也 S.59園 山本 岳史 H. 4園
佐々木北斗 H.16生 上村 文武 H.21修

- 情報満載の映像セリ
 - 便利な予約相対取引
 - ビジネスチャンスを広げる
ネット取引
- イロドリ*ミドリ



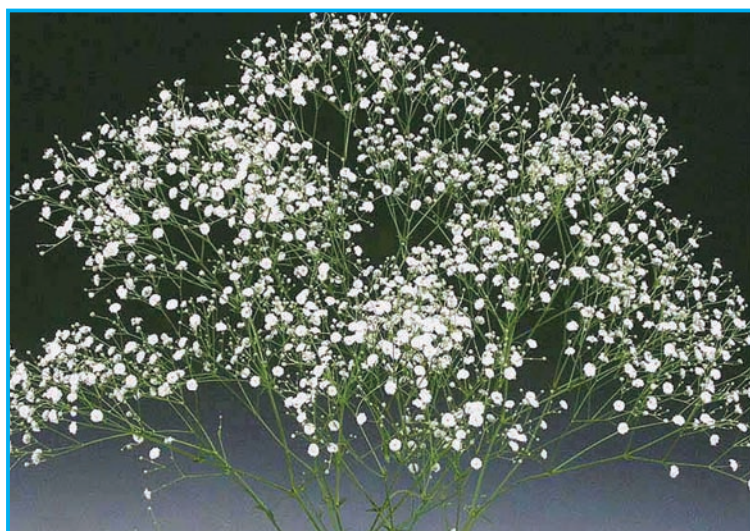
愛知豊明花き地方卸売市場

豊明花き株式会社

ようこそTOYOAKEへ
www.toyoake.or.jp



〒470-1141 愛知県豊明市阿野町三本木121番地
Tel.0562-96-1187(代) Fax.0562-96-1188



花持ち一番！ オリジナル カスミソウ ‘アルタイル’



山梨県北杜市小淵沢上笹尾3181
TEL.0551-36-5911 FAX.0551-36-5900
(株)ミヨシ営業育苗センター
HP <http://www.miyosi.co.jp>

トルコギキョウ

コサージュ シリーズ

存在感のある大輪
トルコギキョウの新しい彩り

長野県 中曽根健氏育成品種。
今までのイメージを一新する輪の大きさ、
表情の豊かさは、フリンジ八重咲きならではの。
豪華で、優雅な花ウエディングを提案します。

株式会社 **サカタのタネ** 〒224-0041 横浜市都筑区仲町台2-7-1
<http://www.sakataseed.co.jp> TEL 045-945-8800 (代表)



サカタのタネ



編集人 山田幸子
発行人 安藤敏夫

発行所 花 葉 会

メタリックな葉の輝きが美しいニュープランツ！

プラチナケール

F1ルシールシリーズ

プラチナケールは、従来のハボタンと
異なり葉の表面に白いワックス成分が
無く、葉にメタリックな光沢がある画
期的な品種です。

タキイは照葉ハボタンの育成方法に関する特許を取得しました！(特許第4256687号)
当品種はこの特許技術を利用して育成された品種です。



F1ルシール ワイン
PVP 農林水産省品種登録・出願中 (出願名: TB524)

F1ルシール パニラ
PVP 農林水産省品種登録 出願中 (出願名: TB525)



ひと粒のタネから広がる未来...

タキイ種苗株式会社

本社/京都市下京区梅小路通猪熊東入〒600-8686
TEL(075)365-0123(大代) FAX(075)365-0150(代)
支店/札幌・仙台・東京・福岡 農場/滋賀・北海道・茨城・長野・和歌山

www.takii.co.jp

〒271-8510 松戸市松戸六四八番地
千葉大学園芸学部花井園芸学研究室内
電話〇四七-三〇八一八八一〇